



ド ス ケ ベ フ オ ッ ク ス

菅 牧 典 合 同

R18



少年ほげほげ

Nara.



Nara.

※好きなセリフを入れよう！

ガッ

!?

ゴポォ

ゴプンッ

※好きなセリフを入れよう!

!?

ゴッポ

※好きなセリフを入れよう！

カッ

!? ↓

ゴポォ

ゴプンッ

※好きなセリフを入れよう!

!?

ゴッポ

※好きなセリフを入れよう!

!?

!?

!?

※好きなセリフを入れよう!

!?

!?

!?

あゝあゝ

無様に射精しちゃいましたねえ…♡
下賤な妖怪如きに屈することは
ありえないって言うてたのに♡

ほら、私はまだ満足していませんよ？
これ飲んでもっと頑張れ♡
人間らしく無様に果てなさい♡

人





Scor
pena
スコルペナ





うひゃっ
なに



ぬっ...
さあて
今日は誰を誑かして
遊ぼうかな

典ちゃんをつかまえて
あひあひさせたい

作: エ+プス



あひあひ



ヒッ
ヒッ
ヒッ

ヒッ
ヒッ
ヒッ





向山の犬天狗様：
の御子息ですか？

ああ：此度の会合で向山を
こちら側へ引き込みたい

承知致しました。

何をおっしゃるんですか
飯綱丸様のお力になれるの
ならば喜んでッ！

いつも
すまないな：

籠絡チャレンジだぜ☆典ちゃん

藤のりひろ @ao_norifuji

典にお任せ
ください！

おらあ！

もっと腰を上げろお！

あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

この女狐が！

色仕掛けで
取り入ろうと
したんだろがぁ！

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん



ふう…
父上には話を通しておこう

どほお

孕んだ時は…
くくく、
妾の一人に
でもしてやるぞ？

おお、典ご苦労だった

ゆっくり休んでくれ

はい…飯綱丸様…

悪い狐を退治しに来た
おじさんとなんやかんやで
床勝負することになった
典ちゃん！
おもいか

男の人って
乳首弄られながら
シコシコされると
すーぐイっちゃう
んだよねー♡

大人のくせに
乳首弱いとか
ダサすぎ

はーい
またでたー♡

なんと
おじさんは
もう一人は
いたのだった！

おいおい
また
イキやがったぞ

お前も
弱いじゃねーか
コラ

乳首とクリ
弄られただけで
イキまくってる癖に

何がダサいだ
オラッ

おじさんを
舐めるなよ！！

勝負は
典の勝ち……と
思われたが……



畜生っ!!

あっ!



おまえっ…
初めから
飯綱丸の…!!

盤外の報い
作・ウラザサ

あは…今頃
気が付いたん
ですか?

クソが!!
お前のせいで
俺の立場は…!!



勘違い
しないでください
私はただ
選択肢を示しただけ

選んだのは
あくまで
貴方ですよ



私に責任を
押し付けられても
困りますねえ







23



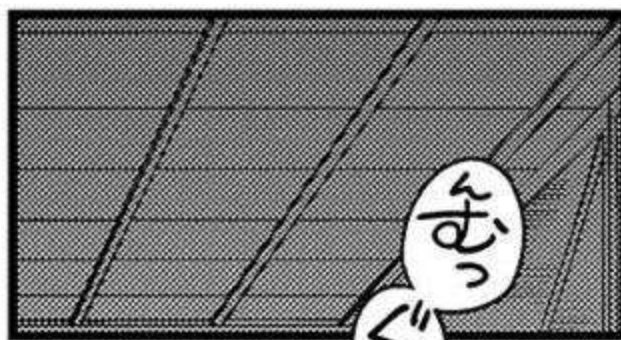




それにしても随分
上手くやったもの
ですねえ

いや……
スムーズに
行き過ぎて
驚いてるよ

大方
典のやつが
動いてくれたん
だろうがな



あなたが
上司になるとはね
……知らない奴より
大分マシですが

はははこれから
こき使つてやる
覚悟しろ



ああ
貴方のクダの
優秀
なんです
ねえ
羨ましい
ものです

だが あいつは
私のこととなると
ちよつと短慮に
なりがちだからな



ありがたいんだが
……それとなく
注意して
やらないとな……



管狐は本来
つがいで生きる
妖怪なんだ

雌雄一対で生きて
ひとの心を食い
爆発的な繁殖を
繰り返す…

だけれど典は
雌一匹で天狗に
奉公させている

私の判断だ

様々なメリットは
あるがリスクも
勿論大きい

…そう

発情期において
爆発的な性欲が
抑えられなくなる

管狐定期性処理業務

石川ナゾゾニク

私の性処理に
一晩付き合っ
てくれる男…

天狗の中で
最も大きな一物を
持つ者が良いです



あっ♡

見てくださいこれ
あなたの性液と
私の愛液…でろでろ

量も…ふふ
申し分なし

流石は
飯綱丸様のご慧眼

どっちがどっちのだから
分かりませんね

ほらここ
ここ座って

ほらもう私ずっと
はしたないつゆが
止まらなくってえ...

あああこれっ
このおちんぽ

膣内を
えぐってくる

私のおなか
足りない空洞を
埋めるみたい

ぴったり
ハマってるっ♡

典さんッ！

ぐん♡







仲良し
曲ちゃん♡

しょう

描いた人
グミちゃん

カワイイ

クマ
マキ

ころん♡

なうに期待
しちてんです??

あなたの粗チンなんて
試験官で

充分

なんです

ク

す

す

た

ミケとツカサ のバリ バトル

かいちみと
お紙

菅牧典は悪だくみの興が
のりすぎて調子に乗った
結果、カモにするはず
だった豪徳寺ミケに
つかまってしまった。

私をつかまえて
どうしようって
いうんだ...

ただ、お前の白さが
ムカついたもんでね
ちよっと塗って
やろうと思ったのさ

とって食おうだ
なんてそんな
ことはしない

服だけは汚したくないからキ
体をさしだすとはねえ...
いったいどんなこだわりがあるのか
私にはしったこっちゃないが
コレはコレでおもしろい

ふとじち

ぬぐ



変態結構、あんたのくだらない
悪だくみとさほど差はない
あんたみたいに真っ白いヤツが

ただただ気に入らないだけさ
ウヒヒ...いい気味だ

ひやつ...
こんなことして何が
楽しいっていうんだ
この変態猫ツ...

いいねえ、いいねえ
最初はアンタの服を
汚してやろうとおもった
けど白い肌を汚すのも
悪くないじゃないか

ほれほれ
ここがええんか
ここがええんか

うっ…
あ…あああ…

お前さんそんなに
良かったのかい？
なんなら
悪さしなくても
塗ってやるぞ

なすすべもなくミケの
ナ○バリバトルに負けてしまう
典なのであった。

なちり

きつねさんアソビ

作 にとさん

おやあ、こんなところで
なにをしているのですか？

コ
ン
！

ぼ、ぼく
きつねさんと
遊びたくて！！

あー、このまえ村の子を
からかってヤツてあげた
話をきいたのか……

がまんしてるのー？
がんばれがんばれー

ほらほら
なっさけないちびちゃん
なんだからすぐだしちゃえっ

ぬーん

うわあちっさーい
本当に男の子？

ン
フ
フ

ク
ポ
ク
ポ

スッ

はあー、まったく近頃の人間は
乱れてますねえ
軽く相手してやりますか

ヤレヤレ

ん？ぼくちゃんは
何してアソビたいのかなあ



へへへへへ
きつねさんは妖怪だから
大丈夫だよね...



いやいやいや、でつかあ!!
え、子供だよな?

ちよ、ちよっと落ち着きましよう
いったあ! 耳を掴むな!
いい加減にしないと子供でも容赦しないぞ!

こ、怖くないよ
妖怪にはなにしても大丈夫って
巫女さんがい、言ってたもの!





ヤキソウ!

沙米

お
づ
お
ッ

うわああ///
きつねさんの
くちの中きもちいい

んああで、でるよ
きつねさん！

トシマ
ザッポ

うわー
うわー

おいっつ 咄トトNo...んべんんべんいっへん

トシマ
ザッポ

トシマ
ザッポ

うめ...

うめ...

うめ...

わあぁぁぁ
やぶやぶあぁぁ!!

ビィ

あ、これって…
先生が言ってたやつだ!

きつねさんって
オシリアソビ
してるでしょ

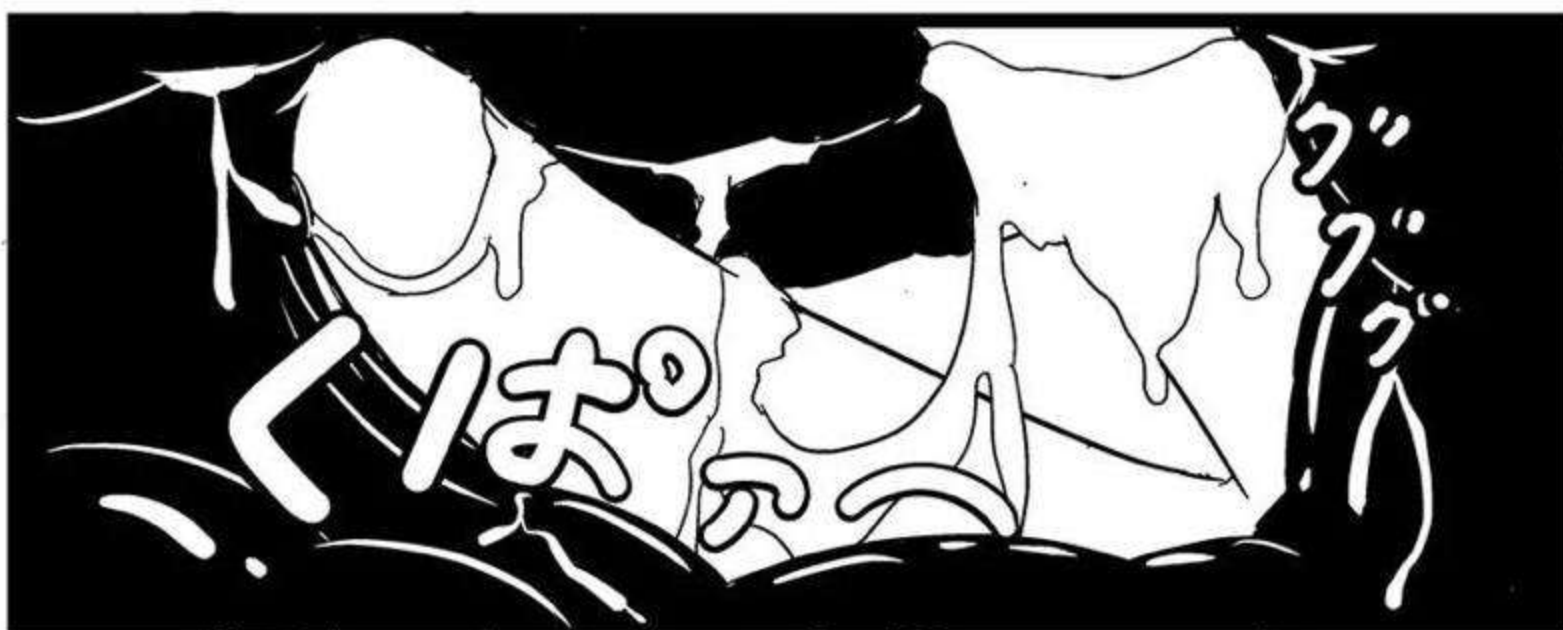
おしりなのに縦に
われちやつてるよ??

毎日遊んでると
こんな下品な穴に
なっちゃうんだね

今度はきつねさんを
気持ちよくさせて
あげるね!

ヌ

うぁぁぁぁぁ



ふあああ
でるッおしりにだすよ
きつねさん！きつねさん！



ふう：…いつの間にか
暗くなつてきちゃったし
危ない妖怪と出会う前に
帰らなくっちゃ

ズバン

ぽかちゅ

：ガバガバに
なつちやつたけど
大丈夫かな

ぷおお

またあそんでね
きつねさん

おまけ

なにそれ
ちっさ：：
ソレ必要あります？

何じや典
お主瘦せて
おるのお

龍に
ちやんと
食わせて
もらって
るのか？

いやまあ
不便のない
程には……

我慢だ
典ちゃん！
描いた人：鹿味曾。

飯綱丸様がいないと
このエロ天狗ども
何をしでかすか……
何か理由をつけて
早く退席しないと

ほれ典いつまで
服を着ておる
はよ脱がんか

ああ……
オッロ……

ハッ
飯綱丸様
ハッ
ハッ
ハッ

急な
ドタキャン
とか聞いて
ないんです
ケドおろろ

さわら

むぎゅ



描いた人：鹿味曾。

こ…
これを私の
中に納める
のは…

少々無理が
あるうかと…

天狗社会…

破滅させて
やる…

後日、天狗社会は
エキノコックス
が蔓延し滅亡した

おわり♡



…典ちゃん

また勝手に
余計なことして

これは
お仕置き
ですね〜♪

ひ〜
お慈悲を〜

弱点丸出し典ちゃん
ザック



ほら♡
こんな乳首
勃起させて期待
しちゃってる♡

そっ、そんな
これは…



期待してるわけでは…

無くて



すっごい下品アクメ♡
乳首ザユです♡

うわ〜



…って乳首やバ！
下着つけて
ないんですか！？

アッ！
コレハ…

龍様からの罰でして
決して自分の趣味ではなく…

でもすごい乳首
勃ってますよ？
縛られて発情
してるんです？

イ、イヤ
シテナイデス

龍様の罰で勝手に
こういう身体に
なっただけで…

ふん…
ナマイきな狐さんは
そういうお仕置きが
好きなんです♡
お仕置き内容
変更ですね♡

えっ！？



弱点丸出しですね♡

下賤な変態発情
ザコマゾ狐の



こっちもいいカンジ♡
マン汁でとろとろ♡

あつ、そっちは
マジでダメッ

服の上から
つまめるくらい

すっごい大きい♡



こんどは私の
とっておきの
おもちゃで…♡

ほらいけ♡
アクメしろ♡

何回もアクメしたのに
まだ勃ってますね♡

これはおさまるまで
うちで徹底的に
わからせないとですね♡

ね？
典ちゃん♡



おやおや、突然花を
押し付けて来たと思ったら。

これはあれですか、
愛の告白というものですかね、少年。
いやあわたしもなかなか
捨てたものではないというものです。

とはいえ少年程度で私を娶ろうなどとは
僭越も僭越というところですし……

げせんなきっね。

ねがたいは

ま、私も最近ぐ無沙汰
ということもあり
少年の管狐を私の
管に収め
やぶさか

……
は？

えー……っと

ぐわん

いやいや
ご立派でした。
これなら別に私で
なくとも
よりどりみどり
女泣かせに
なれるってもの





狐の手の上



THおんど



ほうら…
もっと頑張って…♡

そんなに私の腔なか
気持ちよかったのですかあ？
私まだまだ満足
出来てませんよオ…♡

まあ貴方みたいな人は
もう出来ないですよねえ
私満足してないですけども

いやあ...残念...♡

カ
ッ

乗るのにおおきい



ムリヤリなのか
スキ

まあ、
私の掌の上
なんだけどね

あ、あ、あ



ん♡
もう反応してる…♡

うっ
それは…

ここに
キスされるの
好き？

でも
○○さんの相手は
こいつで♡す♡

えま、まっ
それって…♡

あらあら
おくちで
してもらえると
思ってたんですか？

♡
♡
♡

どんな風に
気持ちよく
されたいのかな？♡

お兄さんの
えつちな願望を
聴かせてほしいな♡♡

やべやわっこい
おっぱいで
スリスリじたり

すべすべの
お尻と太ももに
挟まれたり

あつたかぬるぬるの
おくちまんこで
くちゅくちゅされたり…♡

これは
お仕置きですよ？









いつも
僕のこと好きで
いてくれるのも...っ！

普段ナマイキなのに
ほんとに優しいところも

典ちゃん好きっ♡

大好きっ♡

ちよっ♡



たつぷり
奥に出すから
絶対妊娠してねっ！

トロットロに
発情しきつた顔も
かわいいっ♡

あ…つく
射精る…ッ！！



こんな本気の
種付けえっち♡

絶対♡
ぜったい♡
受精してる…♡♡♡





とうとう
追い詰めたぞ
このドスケベ
フォックスめ

寺子屋の子ども
にまで手を
出しやがって！

宿題もやらずに
オナニーばかり
するように
なっちまったぞ！

まあまあ

やるつもり
なんでしょ？

ちようどそこが
空き家みたいです

服も汚したくないし
あそこで
やりましょうよ

ギザギザ

メスガキツネが
ナメやがって〜

いいだろう
さっさと
入って
逃げ！！

ドスケベフォックスを
わからせろ！！

ひっひ

なぜ都合よく
空き家が…？
俺たちは追い詰めて
いたつもりだったが
まさか…？

おい！
早く来い！

おう！
おう！





68



くだまきつかさは
理解るせられたい!?
描いた人: 非純

ぐいっ
よわそーなおぢさんですなえ
貴方のような下衆に私が
負けると思ってるのですかあ?

騷のなっていない妖怪
メスガキキツネめ…
そこに直れ、教育し直してやる。

どきん

ビキ

どちやっ

へばつてないでさつさと
ちんぽ喜ばせろ。腹の中に
ガキキツネ仕込むまで逃がさねえぞ。

はっ...

どっ...

■

おさちさんの
勝ち!!

HAPPY
END!!



私に手を
出したら：

ご存知
ですよ？

息抜き
作・にゃん



いけないんだ



えゝ頑張って
積んで来た
キャリア
捨てちゃうんですか？







私のものであると
いうことを
忘れた悪い狐を



分からせ
ないとなあ：



はは
こわあい：

end







んくくくくくくくく!



あっ、やめっ、

敏感になってるからっ

いっ
♡

あれ、もしかして本当に
かかっていると思ってました？

私にこんな子供騙しの催眠が
効くわけないじゃないですか……♡

はじめから演技
してたんですよ……♡

にちゅ

にちゅ

ん……♡

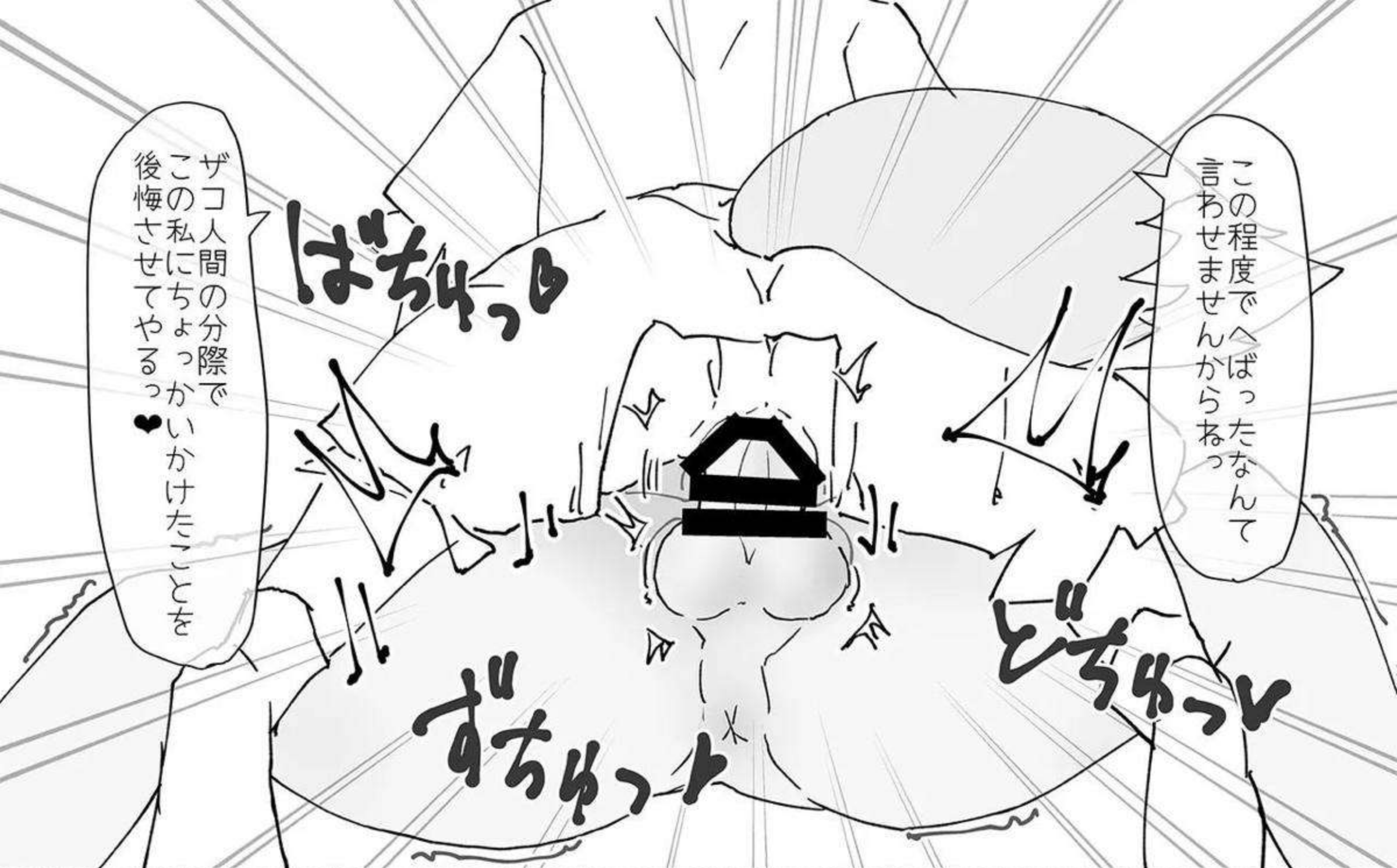
ちゅ、♡

あれ、まだイけますよね？
本番はこれからなんですから……♡

たっぷり可愛がってあげますからね……♡

んぐ、β

んぐ、…β



この程度でへばったなんて
言わせませんからねっ

ザコ人間の分際で
この私にちよっか
いかけたことを
後悔させてやるっ♡



ほらっ、イケっ、もっと射精せっ♡
人間らしく死ねっ♡

人生終あるくらい
射精させてやるからねっ♡

この後
3時間くらい
搾りとられたい

ある日お手伝いさんの
訪問販売がやってきた

胡散臭い気もしたが
可愛い娘だったので
お願いしてみた

そして俺は
この娘に

敗け

つつけている……

いかがですか？♡

お洗濯

お掃除

えっちな
狐さんを
ワカらせろ♡
かいた人 腕

82

わー♡
すつごく
我慢してる♡

はやく
射精しちゃえ♡

ちくび

よわい♡
よね♡

わわっ♡
また敗け
ちやったね♡

ま、また典に敗けて
一日何もしていない

どよーん

このままでは
マズイ…

オスのプライドに
かけて立場をワカ
らせなければ！

おや？
寝ているのか？
起こさないで…

ズズズ…

すぴー

すぴー

いや…？
これは
チャンスか…？

今日こそ
ワカらせて
やるんだ！

つかさちゃんのカチ

次ページへ

ひーす

つかさちゃんの冠

3ページ
後へ

きゅー

ワカらせ
失敗！

寝ている女の子
に何しようとして
たんですか？

にゃあ〜
ぱん

イケない
ご主人様には
オシオキです♡

ご主人様
すーぐ押し
倒されちゃった♡

よわーい♡

ぱん

うわあ♡

大人の男の人が
こんな声で情けない声で
鳴くんのだあ♡

ぱん

ぬい
す

射精すな♡

射精し
ちやえ♡

敗けるな♡

負け
ちやえ♡

イケ♡

射精せ♡

射精せ♡

ワカらせ
成功!

ん?
何の音
だろう?

それに
下半身に
違和感が…

ちよ、ちよっと
何してるんですか!

ちっ違います!
気持ち良くなんてっ

なってます
からっ♡

わっ
わかりました♡

私の負けでっ♡
いいですからっ♡

これ以上されると
私おかしくっ♡
なるからっ♡

だめっ♡
イくっ♡
イっちやうっ♡















おかえり、典

お勤め
ご苦労様

それじゃ早速
聞こうかな

今日のお勤めは
どうだった？

……
今日は
射命丸様から
でした

さんげ、さんげ。



相手が格下とみると
強気になり

乱暴で
蹂躪する
ような：

でも それでいて
情熱的に求めてくる
交わり

ビュッ

びゅん♡

熱く迸るような
精液を

どっ

何度も何度も
胎内に
注ぎ込まれました



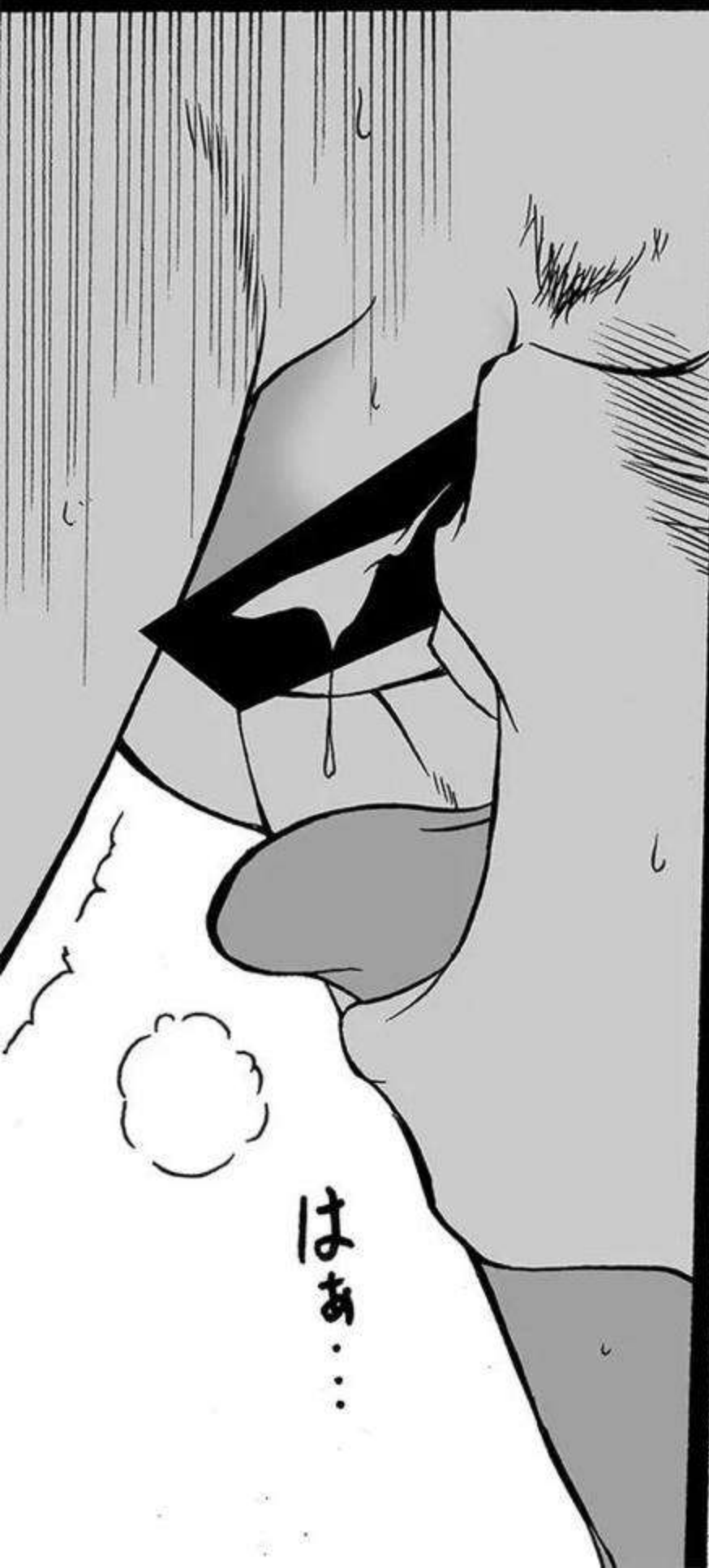
はあ...



お二人の
特濃な精液

たつぷりと
私の胎内に
溜め込まれて
あります...♡

こぶし



はあ...



皆が悦んで
もらえたなら
嬉しいね

では今度は
私が愉しませて
もらう番だ









私は
飯綱丸様を
敬愛して
おります

いや
私は天狗だぞ
狐と番いに
なんて…

飯綱丸様が
どれほど下の者から
嫌われ笑われて
いようとも

私だけは
いつまでも
ずっと
お傍におります

飯綱丸様の
心も体も
私が満たして
差し上げます

糞穴ほじりでも…
未だ未使用の膣穴でも…
一緒に狂うほど
蕩け合いましょう？

ね？
ですから私を
飯綱丸様の
番いに…

やめろ…

やめろっ!!

あだっ



気づいてやれず
悪かったな



107





あー
イグッ♡♡

ききつねの
ぶっとい
マラでっ

く糞穴
ほじくられて
イグッ...!♡

あゝ
イグイグイグッ
イググらゝ♡

おっく♡

ねえ聞いた？
飯綱丸様と
部下の管狐の噂！

聞いたよお
番いの関係
かもって話でしょ？

いつも一緒に
行動してるから？
管狐なんて
低級妖怪にも
情が湧いたとか？

ねえねえ
やつぱり
まぐわったり
してるのかな？

いやケダモノと
交尾とか
ありえないから(笑)

典……
もう一か月だぞ!?

もういいだろ?
これ外してくれよ

ガキッ

勃起しそうになると
締め付けられて
痛いんだよ……!

え……?

どうしよっかな

また職場を精子まみれに
されても困りますし……?

仕方ないですねえ

ではひとつ
賭けでも
しましうか

いや!
もう職場に女を
連れ込んだり
しないから!

あれは射命丸のやつが
生意気なケツを
してたからで……

射精管理

作・石田



っ…典?
これはどういう…?

外してくれたのは
嬉しいが…

暴れられては
面倒なので
拘束させて
いただきました

ルールは単純!
十分間わたくしの
手管を我慢するだけ!

勝利されたあかつきには
好きなだけお射精して
いただいてかまいません!

その代わり負けたら
無期限の射精禁止
ですからね!

我慢出来たら
典の生まんこ
好きにして
いいですから♡

厳しすぎないか!?!
今すぐく張ってて…
耐えれそうに
ないんだが…

うう…っ♡

1か月ぶりに
無責任中出し
したいですよね♡



では
いきますよー！

えいっ

あっ♡

げい

グッ

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

だめだっ♡
刺激が強すぎるっ♡

♡♡♡

♡♡♡

がんばれ♡
がんばれ♡

ほらほら

そんなっ
足でなんてっ♡

飯綱丸様のような
極太ヤリちゃんには
このくらいでちょうど
いいでしょう？

出したらまた
射精禁止ですよ♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡



はっ…あっ
あああっ!!

ふーッ

ふーッ

めちゅっ♡

めちゅっ♡

めちゅっ♡

ふーッ

んー!!

駄目っ典ちゃん
もう…イ!!イク!!

わからされ

イツツ!!

誰がイっても良いと
言っただんですか?

もしかして寸止め
十回目でもう苦しく
なっちゃったんですか?

「沢山いじめてほしい」
「いっぱい気持ち良くして
ほしい」と私に土下座まで
して懇願していた癖に

私がいく前に
一人だけメスイキ
するなんて不公平
ですよねぇ?

エリフダーフックス

わからされ/わからせ

描いた人: 宮瀬 めっこ

要求とお飾り
程度の可愛い
おちんちんの
主張ばかり立派で

前立腺擦られただけで
直ぐにメスイキする
くそ雑魚アナルの
ヘン・タ・イさん♡

も……もう
許してください……
イかせ……て

あッ

んゝあなたの
恥ずかしい喘ぎ声と
けつまんこの水音で
よく聞こえませんか？

ふふっ情けないですね
人間の雄としての
プライドはないんですか？

ああ……雄としてのプライドが
あるのならこうして
けつまんこ犯されて
よがり狂ってる訳ないか♡

安心していいですよ
あなたの望み通り
こうして何度も
寸止めして
けつまんこ壊して
あげますから……♡

あッ

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

ガチュッ

もっと大きな声で
教えてくださいか？

♡ちゅ♡

♡ちゅ♡

プライドなんて
私におちんちん
突っ込まれた時に
もう無くしちゃって
ますものね♡

何か言う事は
ないんですか？

イがせてッ
もうイか……せて
くださいいい

ん……

ア……ありがとうッ
ごじやいま……うう
ありがとうございます……

わからせ

菅牧!!よくも
騙しやがったな!?

今日という今日は
絶対に許さねえぞ!

そ!そんなあ!!
悪いのはあなたじゃ

うるせえ!!

お前が俺をそそのかすから
丁半(博打)に有り金
全部突っ込んだのによ
大負けだよちくしょう!!
謝れよ菅牧!!

はッ
はッ

(...)ごめん

ごめんなさいだろ
このエロ狐!!
すけべな格好しやがって!!

反省しろッ!!

ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ

ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ

ゴッゴッ
ゴッゴッ
ゴッゴッ

ごっごめ…
ごめんなさい!!

反省の色が見えねえなあ?
こうなったら徹底的に
わからせてやるからな菅牧
覚悟しろよ

ひっ…う

はー…

はー…



ほーら♡
おちんぽちゃん
いっぺん♡

かばっ

きゃー♡
れーむさん♡
うしろから♡
そーと♡

ノーパン
もちろん♡
期待してたクセに♡
導入なんか
すっ飛ばし
ちゃえ♡
もちろん

実は3回目♡

今日もびんびんにして
何騒いでるんですか？

ばっかじゃないの!?
ばっかじゃないの!?

被害者
博麗霊夢

うわうわうわ
急に何すんの!
え???
は???
は???

いっぺん♡

おちんぽにター
メスガキつがさちゃん♡
かいた人 奈津みかん





これは毎日
うわー♡とんでもない量♡
又いてあげなきゃ♡
ちゃんとよく見てくださいな♡

はー♡はー♡
はー♡はー♡
はー♡はー♡

んあ♡

自分で出したん
ですよ♡

みる♡

もぐもぐ

生臭♡

げふ

にしても♡
博麗の巫女が

いっかいだけで
収まるわけ
ないですよ♡

勃起したら
交尾だね♡

むん♡

勃起しよ♡

ほ♡

突然おちんぼレイプ
されてそんな事
言われても…ねえ…?

もうしてるじゃん
ロリ♡

きつ♡

やこれは…
生理現象であって

いい♡

しよっ♡
だ♡

♡





いけないんだあ♡
霊夢さん♡

こんな小さい子に
発情しちゃって…♡

でも♡妖怪はぬぎぬぎ♡
トクベリです♡

幻想郷に感謝しながら
腰を振ってくださいね♡

はっ

ぐわんぐわん♡

こうなったら
確実に孕むま
煩いですね…今から
わからせられるのに
そんな口聞いて
良いんですか？

ダメに
決まってんだろ
下品に喘ぐこと以外
禁止です♡

狐さんのビキニは
どうしてそんなに
小さいの？
お前のちんぽをすぐに
食べれるからですよ♡

なんちゃって
ぐわんぐわん♡

最初は4ページの
予定でしたが…
もう使い切って
しまいましたね♡
あと2ページあれば
もっと気持ちいいコト
できるんですがどうします？

ちょっと聞いて
みましょうか

主催
「まだ締切まで
時間はありますよお♡」

よかったですね♡
交尾できますよ♡

今から私のあなたは
こがいです♡

ただの雄と雌です♡

倫理も理性も
ありません

きっと♡
ハマりますよ♡

《好き》と《気持ちいい》
その感情一つだけで
一晩過すんです♡
他の感情は要らないので
捨ててください

のび
ぐわんぐわん♡

ヤワヤワ♡

ぐわん





うわあ...♡
とんでもない
量ですなあ♡
最低♡

ガクガク
ガクガク
ガクガク

んんんんんん
んんんんんん
んんんんんん

このおっぱい
わーっ♡♡♡

ぽんぽん

ガク
ポン
ポン

たぽん
たぽん
たぽん

ドンドン
ドンドン
ドンドン

イチャイチャ
イチャイチャ
イチャイチャ

もし勃起したら
いつでもお布団まで
伺いますので♡
覚悟しといて
くださいね♡

ちゅっ

とんでもない事に
なったぞ...♡

飯綱丸様
少々よろしい
ですかあ？

ん
どうした？
典

お仕事で
お疲れかと
思いました

フーン

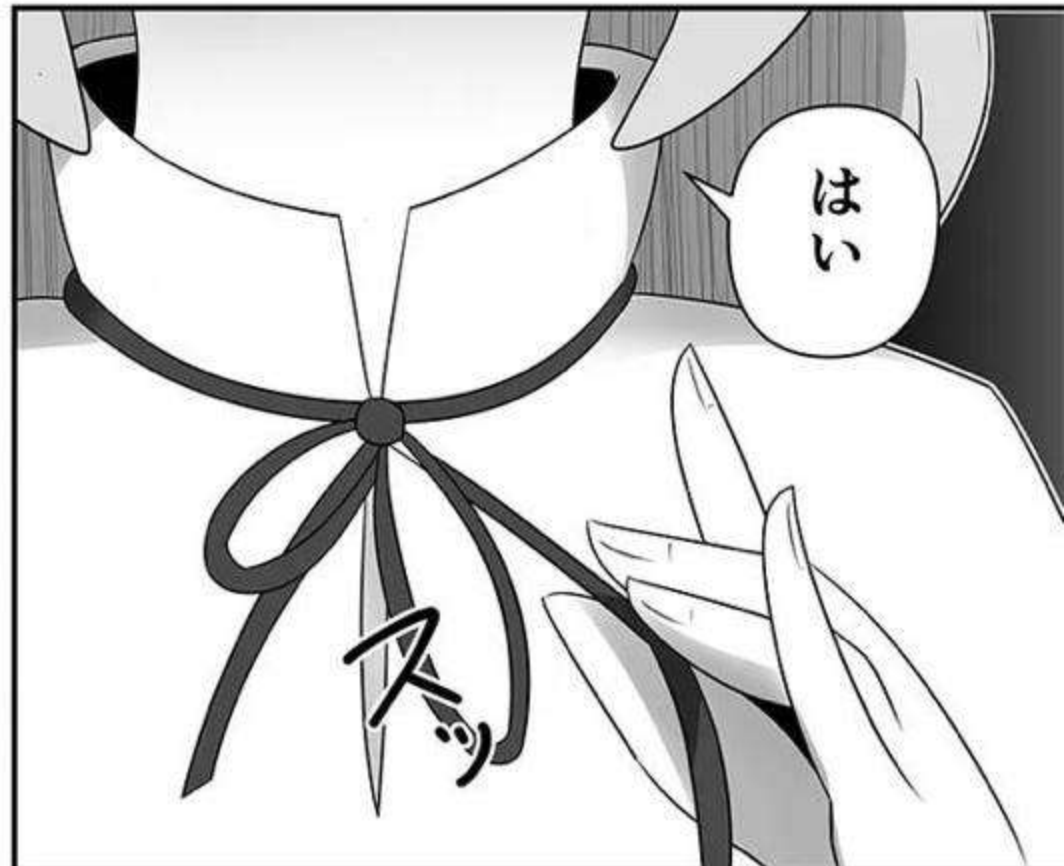
菅牧典は
わからせたい
宵闇鳥

ご奉仕いた
しますよ♡

ツツツ……

いかがですか？

明日はお休みに
なるよう
調整しましたし





うふふ
どうして
欲しいですか？

好きに
しろ

それでは
お言葉に
甘えて♡

ギ
シツ



飯綱丸様あ

あは♡

うはっ



久しぶり
だからって接吻
だけでこれは

張り切りすぎ
じゃないですか？

そんなに私を
犯したいん
ですかあ？

ぐぐっ





大天狗様の
早漏おちんちん

もう
ビクビク
してますよ♡

あっ♡

んごっ…♡

イきたくて
たまらないんで
すねえ♡

我慢しなくて
いいんですよお♡

溜まってるモノ
ぜーんぶ
吐き出しちゃえ♡



射精すぞ
典っ！

あーっ♡
あーっ♡
♡

イッッッ
♡

あーっ♡
あーっ♡
♡

A

あーっ♡
あーっ♡
♡



ハア
...

アッ
♡

アッ
♡

ハア
...



妖怪の山では、常にドロドロの政争が繰り広げられている。菅牧典は、そのなかで良くも悪くも名を知られていた。

生き馬の目を抜く社会を暗躍してきた彼女は、たいへん恨みを買っている。今まで何事もなかったのは、天狗の気位の高さゆえだ。下賤な管狐ごときに手玉に取られるなど恥でしかないという考えだ。

ただし、例外はある。短慮で知られる一派に、典は拉致されていた。夜道で後ろから殴られ、気絶させられた。目覚めたときには裸だった。気を失っている間に、ひん剥かれたらしい。

放り込まれた部屋は板張りで、ろくな調度品もなく殺風景きわまる。扉は天狗基準に、重厚な鉄製でつくられている。鍵も頑丈だ。

身じろぎするたびに、じゃらりと音がする。ごつい首輪が嵌められており、おなじくごつい鎖で壁に繋がれていた。まるで畜生同然の扱いだ——不服きわまるが、肉体面において貧弱な管狐では逃げようもない。「くう……っ」

身体が熱くてたまらない。室温でなく、部屋に焚かれた香のせいだ。媚薬かなにかが練り込まれているのか、息をするほど肉が昂ぶっていく。「はあ……っ、はあ」

少しでも熱を冷まそうと、荒い呼吸で酸素を取り入れる。すると必然、甘い匂いが肺に流れ込み、腹の奥から情欲がこみあげる。悪循環だった。全身に汗が浮かび、しっとりしている。異様な興奮に、肌は紅潮している。身体をよじって堪えようとするが、まったく無意味だった。状況も弁えず、じくじくと皮膚が疼いていた。

女を裸で牢に放り込んで、こんな風に仕立て上げる輩が何をするかといえはひとつ、陵辱だ。貞操の危機だが、どこにも逃げられない以上、もはやどうしようもなかった。

「やあ、お目覚めかね」

鉄扉がガコンと音を立てる。入ってきたのは、肥満体の中年鴉天狗だ。一見すると温厚そうだが、隠しきれない外道の雰囲気漂わせてもいた。素っ裸で、弛んだ肉を晒している。くろぐろとした股座もむき出しだ。媚香に浸された脳味噌は、自然とそちらへ注目してしまう。

「良い具合に仕上がっているようだねえ。私個人としては、君に恨みはないが。私の上司が、飯綱丸どのの政策でえらい損害を被ったようでね。君の献策だったんだろ？ 己の分際を思い知らせてやれと言われてね」彼のいう「思い知らせる」が何を意味するか、分からないほど初心な典ではない。肉体を犯し、尊厳を踏み躪るつもりなのだ。

断じて認められない——そう思っているはずだというのに、焚かれた本能が惹かれていた。

「それにしても……君みたいな上玉をコマせるなんてね。役得だよ」

せいぜい睨み付けるが、男には意に介した様子もなかった。こちらを見つめる目には、弱者を見下した色と、性欲ばかりがある。下卑た視線が、剥き出しの身体を這う。典の身体は、彼がいうだけのものはあった。もともと典は、対面の相手がついつい警戒心を解いてしまう程度には、整った相貌の持ち主ではあるのだ。体付きも負けていなかった。華奢でスレンダーでありながらも、適度に脂肪を纏った、女性らしいボディだ。グラマーとはいかないが、柔らかい、ほんのり凹凸のある曲線を描いた極上の逸品だ。

普段、他者の弱味につけこむ武器として利用されているそれは、今は無防備に曝け出されている。媚毒で焚きしめられて汗ばみ、性的興奮によつて色付いている。肌の白さ・滑らかさもあいまって、あらゆる男を魅了する代物になっていた。

くびれば折れそうな首が、儂さを印象づける。肩のなだらかな稜線と鎖骨の輪郭も、優雅で上品だった。か弱い狐を装い、相手の油断を誘う、

狡猾な釣り餌だ。

Bカップの双丘は、平らかながら実に形がよい。若々しく、瑞々しく、つんと上向いて尖っている。視線を引き込まれる存在感があった。

引き込まれるといえば、その先端もだ。淡い桜色で、ぶっくり尖っている。今私は昂ぶっていますよ、ここが弱点ですよと主張しているかのようだ。男の弛んだ瞳も、攻撃的な色合いを帯びていた。どう勝るか、と考えているに違いない。

腹回りのすらりとした印象は、ふだんのタイトな衣装からも分かる。しかしこうして露わになると、健康的な雰囲気もあり、また一味違う。縦にすっとくぼんだ臍が、なんともコケティッシュだ。

骨盤はほんのりと広がっている。秘めやかなる三角州は、整えられた芥子色の毛によって守られている。裂け目はすでに緩やかに花開いて、湿り気を帯びていた。蠱惑的なフェロモンを漂わせている。本人の性的興奮を、如実に物語っていた。

「私はまあ今やってるように、女に色々する仕事をしてるんだけどね。君のような上玉は本当に久々だよ。ほら、もうこんなになっちゃった」
「……っ、あ」

男が近づいてくる。下がろうとしたが、すぐ背に壁が触れる。もはや立ってられないほど欲情した彼女の眼前に突きつけられたのは、勃起した男根だった。

中年ともなれば、男性機能にも陰りが見えてくる頃合いだ。しかし、彼のモノはそんなことなど知らぬとばかりの逞しい姿を晒していた。

えげつないほど立派で、雄々しく反り返り、不遜に天を衝いている。典の顔より長く、赤子の腕ほども太い。凶悪きわまる代物だった。

龟头は肉厚な茸ほどに張り出しており、薄黒い幹はびきびき張り詰め、血管を這い回らせている。根元の玉も、信じられないほどのサイズで、グツグツと煮えて精子を製造しているのを感じさせた。

排泄のためでなく、女を鳴かせて屈服させるためにあるのだと一目でわかる、すさまじい大業物だった。ただでさえ肉欲に狂っているのに、こんなものを見せつけられて、正気でいられるわけもない。

目の前で、魔羅がメトロノームのごとく揺れる。性的欲求に蕩けた瞳が、自然と左右へ追いかける。

「こ、こんな粗末なものを、女に見せて。恥ずかしく、ないんですか」
生意気な字面とは裏腹に、声は震えていた。眼前の威容に、ある種の畏れを抱いているのだ。

汚らしくおぞましいはずなのに、目をそらそうとは思えない。口中に、涎が溢れて止まらない。光に惹きかれる蛾のごとく、唇が先端へと引き寄せられていく。

「……っちゅっ……」

舌打ちにも似た、小さな音が鳴った。魔羅へ口づけたのだ。

己を陵辱しようという輩のまえで跪き、あまつさえその男根にキスを捧げてしまった——もちろん、嫌悪感を覚えている。にもかかわらず、本能は悦びの声をあげていた。

「っちゅ、っふっ、ううっ、ふう、っちゅむっ、んちゅっ、ふううっ」

彼女は知略家ではあるが、もとは妖獣で、衝動的な性質をもつ。故に、肉の疼きには抗えない。何度も何度も、口づけを捧げていく。初めこそ触れただけだったのが、だんだん熱を帯びる。接吻と呼ぶのに相応しくなっていく。

そうして唇から伝わってくるペニスの熱量が、子宮を強く疼かせる。気付けば、太腿を擦り合わせていた。聞こえてくるのは、皮膚の摩擦音ではない。くちっ、ぬちっという、秘めやかなる蜜の音だった。

「そら、しゃぶるんだ」

前髪を掴まれ、命じられる。誰がそんなことを——と返そうとするも、ずずいと突き出されたイチモツを前にしては、もはや言葉もなくなつて

しまう。はっ、はっと、発情した牝犬よろしく荒い呼吸を繰り返す。

薬漬けにされて、首輪を嵌められ身体の自由を奪われている。抵抗のしようがないのだから、拒むだけ無意味だ。素直に受け入れ、さっさと満足させてしまったほうが、まだ合理的だ。

そんなふうには己に言い訳しながら、口を開く。胸を高鳴らせながら、ぱくりと、雄棒を口内に迎え入れた。

「くっ、ふううっ……」

口内に満ちるのは悪臭だ。名前も知らない、今日出会ったばかりの、敵ですらある男のペニスの臭い。快いわけもない。

にもかかわらず、ひどい官能の昂ぶりが押し寄せていた。目尻が垂れ下がり、瞳が蕩ける。たまらないとばかりの聲が、喉奥から溢れた。

「んぢゆる……—ぢゅぽっ、んっふっ、ふう、んぢゅうっ、んむっ、んぢゅうっ、ぢゆる……」

魔羅を咥えただけで、満たされるわけもない。命じられるまでもなく、頭を緩やかに前後させ、しゃぶりたてる。ぢゅぽっ、くぽっと、唇の端からねっとりとした唾液の音が鳴る。

「んっぢゅっ、くぷっ、んふうう、んうう……ッ」

即尺ゆえ、竿は臭く汚らしい。口内に広がる臭いも味も、実にひどい。それと反比例するかのごとく、口淫は情熱的だった。商売女でもないほどだった。早く射精させたほうが手っ取り早いという建前すらおいて、行為に没頭している。

ひとえに、全身にまわった媚毒ゆえだった。そして、今こうしている間にも、部屋に焚かれた香は彼女を苛んでいる。

「んううッ、ぢゆるぽっ、くぷうっ、んぽっ、んぶう」

謀略を張り巡らせる過程において、女の武器を使うことも少くない。が、今繰り出されているのは、そうした手管とも違っていた。男を弄び、手玉にとる唇使いではない。媚びた、卑しい牝の奉仕だった。

たとえばそれは、緩やかに前後する頭や、窄まった頬、竿に吸い付く瑞々しい唇。そしてなにより、口内で蠢き、裏筋からカリ首まで丁寧に舐め上げる舌の動きに現れていた。

「んっ、んっんっ、んうっ、んくふう……っ」

ぢゅぽッ、くぽっと、唾液と空気の抜ける音が響いている。典の甘い息づかいもだ。さらにもう一つ、粘っこい蜜の音も聞こえていた。

細く白い指が、自らの股座へと伸ばされていた。とろとろと蜜を滴らせる陰裂を、こね回していたのだ。くびれた腰が、緩やかに踊っている。あらゆる雄を誘い勃起させる、魅惑の腰使いだった。

指の動きはずいぶんと激しく、はしたない。ぐちよぐちよと音が鳴るたび、床に蜜がまき散らされる。目の前に見知らぬ男がいるなどとは、思っていないかのようだ。

にもかかわらず、燃え上がるように疼く子宮は、それでも足りないと思えていた。どこまでも貪欲に快楽を求めている。

「おやおや……。チンポをしゃぶって発情するとは。どうしようもない牝豚だ。しよせんは下賤な管狐ってことかな？」

「んぽうっ、っは、誰が」

腰が引かれる。夢中でむしゃぶりついていた口腔から、雄棒が抜ける。コルク栓を抜くのと同一原理で、口端からくぼんつと音が鳴った。

嘲笑を向けられ、わずかながら理性を取り戻す。きっと男を睨んだが、その瞳は、目の前で揺らされるペニスを自然と追いかけるはじめてしまう。舐めまわしたいとばかりに口は開き、はっ、はっと浅く荒い呼吸を繰り返していた。

「どら、牝豚は牝豚らしくマーキングしてやろうじゃないか」

「んあっ、はっ、ああ」

顔面に、唾液まみれの一物が擦りつけられる。先走り混じりの液体を、塗りたくられている。

「ちよつと……っ、女の子の、顔に、何を」

えげつない臭気が、皮膚細胞に練り込まれていく。くらくらしそうな匂いが、呼吸するたび媚毒とともに肺へと流れ込んでいく。呼吸器系を男根に犯されているがごとき感覚に、視界が暗くなるほど興奮する。

「は、あつ。最低、最低、最低ッ……」

女は顔が命という言葉がある。とすれば、これはもはや生命に対する冒瀆に等しい。にもかかわらず、典の顔は恍惚を浮かべていた。最低と繰り返しているが、心中に湧いている思いは、明らかにその真逆だった。「最低、ねえ。そのわりにそんなに牝汁を垂れ流して、実際のところはハメてほしくてしょうがないんじゃないのかい？ ええ？」

「そ、そんな、わけ」

「嘘はよくないなあ。でなきゃあんなに美味そうにチンポをしゃぶるわけがない。現に今も、発情期の犬ころみみたいに舌突き出して、エロい顔晒してるじゃあないか」

まったくの言いがかりではない。今もこうして顔面に塗りたくられるペニスを、舐めたい・しゃぶりたいとばかりに舌を突き出しているのだ。それを「エロい」と称さなければ、もはやこの世に性的なものなど存在しなくなってしまうだろう。

柔らかな頬から鼻筋、唇、瞼にまで、くまなく肉竿が押しつけられる。えげつない男根臭でマージングされ、どうしようもなく発情させられる。さらには、突き出された舌へ、龟头をべちべち押し当てられる。鈴口からねっとり滴る、痺れるようなえぐみのある先走りは、ひどく不快だ。にもかかわらず、堪えがたいほどの甘露に感じられた。

そんなものを味わわされては、最後の最後に振り絞った理性すら打ち崩されてしまう。せめてとばかりに浮かべた反抗的な表情も、すぐさま蕩けてしまった。

「そら、ほしいんだろうがチンポが。その助平な穴ポコに、ええ？」

「はっ……ッ、は、い、ほしいです」

とうとう、頷いてしまう。言葉のうえだけでも偽ることすらできないほど、昂ぶっていた。

なにせ、今こうしている間にも、肉穴を指でこねてしまっているのだ。ほじられるたび、陰裂はぐちょぐちょと音をたてている。助平な穴ポコという表現が、罵倒でなく真つ当な比喩になる程度には猥褻だった。

「なら、自分からねだるんだ。こっちは別に、このまま顔射をキメてもいいんだからね。何かをしてほしいなら、誠心誠意お願いする。卑しい狐でも、それくらいは当たり前になるだろう？」

客観的にいえば、荒唐無稽な理屈だった。平時であれば、鼻で笑うのも馬鹿馬鹿しいと感じていたろう。そんな戯れ言を、今は断れなかった。今すぐにも雄棒をねじ込んでもらわなくては、燃え上がる子宮の疼きに殺されてしまいそうだったのだ。

「わ、私、菅牧典は。拉致されて裸に剥かれて、レイプされそうなのに発情して股を濡らして、あまつさえその犯人である強姦魔の肥満中年のお勃起を求めてしまう、いやらしく卑猥な管狐です。今もガッチガチのおチンポ欲しさに、子宮を疼かせて蕩かせて、ネバネバの牝くさい汁をまき散らしながら淫乱おマンズリをぶっこいてしまっています。こんなどうしようもない、卑しくて下賤な変態管狐の、締まりのないユルユル穴ポコでよろしければ、どうか貴方様の硬あくてぶっとくて長あくいおチン棒様で、ズボズボして、パコパコして、中身が抉れるくらいまでほじくってくださいませ。避妊なんていっさいナシの、本気ナマレイプファックで、気持ちよくく無責任膣内射精をかまして、パンツパンに張り詰めた金玉に溜まったグツグツの優性遺伝子搭載濃厚特級お精子を、好きなだけこの下品下賤最低畜生子宮めに注ぎ込んでくださいませっ、どうかよろしくおねがい致しますうッ……」

一度口を開けば、もはや止まらなかった。管狐として磨いてきた弁舌

でもって、雄を誘うためのどうしようもない口上を並べ立てる。もはや

まともにものを考え、判断することもできないほど脳味噌は煮えているにもかかわらず——いや、だからこそ、誘惑の言葉は驚くほどに滑らかに流れ出る。いつもの、人を舐めたような態度など、どこにもなかった。

男はその全てを、弛んだ頬をニタニタと歪めながら聞いていた。高慢ちきな管狐を、牝に貶めた優越感に浸っているのだ。同時に、その男根は、目の前の穴をぐちゃぐちゃにする興奮でギンギンと苛立っていた。

「そんないうなら、私も鬼じゃない。くれてやろうじゃないか。管狐ごときにチンポを恵んでやらなきゃなんて、仕事の辛さってもんだなあ」
「あつ、アツ、ありがとうございますッ」

体重でもって組み伏せられ、床に四つん這いにされる。獣の姿勢だ。お前ごとき畜生ふぜいにはこれがお似合いだ、といわんばかりだった。

屈辱的な扱いすら、今の彼女には興奮を煽るスパイスとなっていた。へりくだった言葉を吐きながら、小ぶりながらも形のよい尻をふりふりとくねらせる。

「あつ、っはっ」

剥き出しの肉貝に、雄棒の先端が押し当てられる。発情しきりで白濁した涎を滴らせる陰裂は、それだけでキュツと収縮する。どれだけ性交を待ち望んでいるか、端的に示している。

「あつ、はあ、ああん、ああッ……」

腰を蠢かし、龟头を裂け目へ擦りつけてくる。ぬち、くちつと、蜜音が響いている。

性粘膜で味わう男根は、口腔で感じるのとは比較にならないほど硬く、熱く、なにより雄々しい。人体がいったいどうやったと思うほどだ。これが今からねじ込まれるのだと想像するだけで、たまらなかった。

「あつ、ッ、っひひひひひッ」

男のでっぴりした腰が、なんの宣言もなく突き出される。濡れそぼつ

狭穴を、雄棒は容赦なく割り開く。鉄槍の穂先のごとき龟头が、肉襞をめくり返し、蹂躪する。えげつないほど太い肉幹が、膣肉を拡張していく。ばあんッ！と、肉と肉の打ち付けられあう打撃音が響いた。部屋の外にまで響きそうなほどの嬌声が続いた。

「おッ、っひッ、ひい、はひッ、ひい……ッ、あは、はああッ、ああ」
ガクガクと、全身を震わせる。スレンダーな肉体で受け止めるには、男の魔羅はあまりにも立派すぎた。体内を真つ二つに引き裂かれたかのごとき圧迫感に、裏返った嗚咽が喉から漏れていた。

「おっ、締まる締まる。なんだこのエロマンコッ。こんな卑猥なモンぶら下げて、私や賢い賢い管狐でございなんてツラしてたのかこの女ッ、反省しろッ！」

「ああッ！ おおおウ、おんッ、ああッ、アツ、おう、おおッ！」
一息つく暇も与えられなかった。女を墮とすための、えげつない抽送が繰り返されはじめる。赤子の腕ほどもある凶器で、女としてもっとも大切な器官を挟り倒してくる。

「おおッ、ひいひッ、ああッ、んあッ、おッ、っひひッ……！」

ゴリゴリゴリと、体内から拡張音が聞こえてくる。このペニス専用の鞘に、肉体が造り替えられているのだ。そうして生じる快感は、脳味噌の神経を灼きそうなほどだった。目を見開き、喉から引きつれた嬌声を漏らすほかにない。

肉同士のぶつかる小気味良い破裂音が断続的に鳴る。小ぶりながら形の良い桃尻が、ぶるんぶるんと波打っている。ずちゅッ、ブヂュツと、粘っこい音が響く。ピストンのたびに、雌蜜がまき散らされていた。

「はは、こりゃあいい。大天狗の腹心なんてやめて、淫売にでもなったほうがいいんじゃないか、ええッ!?」

「ひッ、ああッ、ああッ！ ひいッ、アツ、アツ、あッ！」
ストロークによって生じるのとは異なる破裂音が、室内に響く。悲鳴

交じりの声が続く。

無防備に突き出されていた臀部へ、思い切り平手が繰り出されたのだ。天狗の膂力による一撃は、なだらかな臀部へくつきりと、これ以上ない紅葉の痕を残していた。

「ひいッ！ ああッ、んっはッ、ああッ、ああッ！」

それが、ピストンと合わせて何度も繰り出される。二種類の打撃音は、彼女を確実に追い詰め、狂わせていく。髪も尻尾も振り乱して、性交の快感によがる。

「そらッ、そらッ、そらッ」

「ひいッ、ああッ、ああッ、おおんッ、ああッ、ひいッ……！」

腰がひときわ深く突き出される。体内から、ゴツッゴツッとノック音が聞こえてくる。女として最も大切な器官、子を成すための聖域の入口、すなわち子宮口をサンドバッグにされているのだ。

目を見開き、歯を食いしばり、ひいひいとみともない声でよがる。身体のを、ペニスのために捧げている気分だった。

「おッ、おおッ、締まる締まるッ、おおッ、そろそろ出るッ、おおッ、おッ、おおッ……！」

「アッ、アッ、ああああ、っひいッ……！」

擦れて火がつきそうなほど、ストロークが激しくなっていく。ズチュズチュズチュッと、えげつない音が室内に響く。そのリズムが最高潮に達した瞬間、イチモツが炸裂した。

「おッ、出るッ、出るッ……！」

拳ほどもある睾丸が、ギュッと収縮する。子宮口と密着した鈴口から白濁汁が放たれては、聖域へとぶちまけられていく。快楽器官と化したウテルスは、乾いたスポンジに水が染みこむように、子種を飲み干す。

「イッ、イクッッッ、あッ、ああああ……ッ！」

膣穴から背骨を通り、快楽信号が脳味噌へ叩きつける。引きつれた声

が、喉から迸る。プライドもなにもなく、半ば白目すらむき、ひたすらよがり狂う。誰が見てもそれとわかる絶頂だった。

「おッ、おおッ、おおッ……！」

「ひい、ひいッ、ありがとうございます、ありがとうございますっ、おまんこレイプ無責任ナマ中出しありがとうございます……ッ」

精虫一匹残さず吐き出すぞとばかりに、腰をぐりぐり押しつけてくる。いまだ硬い亀頭で、ポルチオを思い切り刺激してくる。アクメの最中にあるヴァギナには、てきめん効く。感謝の言葉が自然とこみ上げていた。

「おッ、おおッ、っお……っお、出た出た」

「あんッ、は、ああ、ああ……ッ」

ようやく男根が引き抜かれる。散々腰をぶつけられ、平手で打たれたヒップは、猿のように紅く染まっている。

えげつない魔羅で穿たれまくった肉貝は、すっかり閉じなくなっていた。濃い白濁と愛液の混じった汁が、でろお……と零れ落ちた。

「さあて。これからまだまだ、自分の分際ってもんを思い知らせてやる。楽しみにしておくんだよ」

「あは……は、ッ、はあい……っ」

眼前に、役目を終えた魔羅が突き出される。汁という汁でべとべとのそれを、愛しげに舐め回す。まだまだ、陵辱は終わりそうもなかった。

火焰猫燐の不運で幸運な一日

インサイト

その日はあたいの収穫は全く無かった。日は高いが、空でしかない猫車を押しながら帰路につこうとしたその時、何かが後ろから声をかけてきた。

「お燐さあん、ちよつとよろしいですか

あ？」

あたいは無視しようとした。なぜだろうか、無視できなかった。こう見えても旧都や地霊殿は精神攻撃のエキスパート揃い、あたい自身にもある程度の耐性があるだろう、そう思っていた。それはとても甘かったのだけど。

また、その何かは、声の感じからあまり強そうに思えなかった。本気の攻撃で消し飛ばせられる、そう思っていた。それはとても甘かったのだけど。

「お・り・ん・さあ・ん」

右の人耳の後ろで囁かれると同時に、しつぽの付け根の上を軽く服越しに指2本で撫でられる。びくつ、と軽く反応してしまう。頭の中で

警報音がかすかに鳴る。だけど動けない。脚が動かない。おそらくハマった。妖力を一切用いない、囁きと物理的接触の攻撃。自覚してなかった、堤の蟻の穴。

場所は再思の道の近くの荒野、人の影も妖怪の影もない。見晴らしは良いが、闇妖や夜雀の気配すらない。

「ど・う・し・ま・す？」

しつぽの付け根の上を軽くとん、とん、とんと軽く叩かれながら、左人耳の後ろで囁かれ、キスを落とされる。だめだ、術中にハマったようだ、と、観念しつつ、頷く。そして、せめて場所を、と願う。その願いだけは、それだけは、通じた。

近くの草むらの中に移動した。その狐らしき妖怪は、聞かれるまでもなく、後ろから菅牧典、と名乗った。一応知っている名だ。妖怪の山、大天狗の部下の管狐、だったはず。……だけど。そいつが、なぜあたいの体を弄ぼうとしているのか。考えようとした途端、右人耳の後ろに舌が這う。軽く、くすぐるように。時にねつとりと這う舌に気を取られた隙に、下腹のあたり

で腕を回されて、服の上から抱きしめられる。太ももで尻の肉をくすぐられる。腹に回された手が指が布越しにうねりながら撫で回してくる。意外なほど早く、あたいは反応し、蕩けつつある。

「ふふ、あの火車猫さんは意外と淫乱なんですよ、ねえ？」

え、そんなに乱れてたの、と思うと一気に意識がざわめく。と同時に右人耳を口に含まれながら、太ももで器用に尻を服越しにこねられ、あたいのなかの欲求が反応してしまう。いや、反応していることを否応なしに自覚させられてしまっている。先程の言葉が嘘か真かはわからないが、今のあたいはたしかに淫乱かもしれない。おそらくそうだろう。多分。

「親友や主人に、こんな顔をしているところを見られたら……ねえ？」

典の使い魔が器用に手鏡を持ってきて、あたいの顔を映す。鏡に映る顔は、蕩けはじめでいて。目が潤んでいて口が開いていて顔が紅くなっている。

典は、なにか聞き取れないような聞き取れるようなことを囁いたり、左右の人耳やうなじを

舌や口、キスで弄びながら、あたいの服を脱がさないまま、後ろから密着した体勢で、あたいの首筋、うなじ、人耳、腹、尻、胸を、丁寧に撫でさする。意味ありげな囁きを聞き取ろうと注意を向けてしまうと、予測していない箇所を撫でさすりつねりに身体は反応を強めてしまう。肌が強く熱を帯びて色づくのがわかる。ぞわぞわと毛羽立つ感覚。止めようとするが目覚めたケモノが止まらない。振り払おうとしても湧き上がる欲求が止まらない。近づいている、着実に、近づいてはならない絶頂が。

「きもちいい、なんです、ねえ？もうすぐ、なんです、ねえ？」

忘れていた羞恥の感情が沸き起こる。なにか言葉を抵抗を、と思う刹那、服越しに下腹から胸の中央まで縦になぞられ。強く火花が散る。

気がつくのと、着衣のまま、絶頂していた。

問題なのは、下着どころか服も、あたいのお汁がべつとりとついていること。その意味を考える暇は与えられなかった。再び耳の後ろから囁かれた、から。

「もっともっと、きもちよく、なりたいですかあ？」

肉欲、ケモノに従って頷く。あたいには、その意味するところを考える余裕は、もう、なかった。

服を全てのろのろと脱ぐと、典もなぜか脱いでいた。もう、下着や服にすらべつとりと汁がついていて、多分臭ってしまったのだろう。

典の身体はかなり貧弱。あたいの頭が多少まともなら、すぐにでも消し炭にできる相手だろう、とは思うだろう。そんな余裕はなかったのだけ。

気がつく、また後ろに密着されてしまった。凹凸が乏しい典の体が、あたいの背中にぴったりと密着している。むきだしになった乳首も陰核も、外気に触れて反応してしまっている。しかし踊る典の指は敏感なところを直接に触ってくれない。円や螺旋を描くように周りの皮膚から近づいたと思うと、すっ……と離れる。何度も。何度も。何度も。

喘ぐ声が聞こえる。サカッたお汁のにおいが濃い。その声も汁もあたいのものである、と認

識するのにさえ時間がかかって、その認識がさらにあたいの意識を桃色の霧に落とす。喘ぐ声。雌の声。それがあたいのものだ、と認識した刹那。

「ふふ、二度目です」

その意味するところを理解するまでもなく、不意に。陰核と右乳首をつねられて、飛ぶ。高く、高く。びくり、びくり。

桃色の霧がかかりながらも、うつすら気がつく、典は様々な色に発光する張り型をどこから取り出していた。正確にはあたいの知る張り型ではない。それは小刻みに振動するのだ。

今まで見たこともないものだが、大きさはさほどでもない。段差が心持ちきついぐらいか。そして、いつのまにかあたいは仰向けに寝かされて、脚を開かされている。……ということとは。

「お隣さんの、イキ顔、じかに間近で見せてもらいますね」

その言葉で挿入を覚悟したあたいを襲ったのは、陰核と陰唇をゆるやかに上下する穏やかな振動。思わず腰が浮いて、肉の門が開いて、迎えようとしてしまう。迎えている。迎えたい。

むかえたい。むかえたい。こえがでてゐるかはわからない。もうわからない。きもちよくなり
たい。

「はい、どうぞ」つかさ、のこえ。

ゆつくりと、ふるえながらなにかが入って
く。軽いぱちぱちが何度も何度も、花火や火ば
なが頭のなかで、あたまのなかで、ぱち、ぱち
して。ぐりい。おくのかべ、えぐられて、とび
ながら、とんでるのに、おりられないまま、ひ
ばな。ぱちぱち。こえ。だれ？ないてる、だ
れ？

なにかいつている。だれが？わからない、い
みもわからない。

つよめのひばな。ぐぐつ、ぐぐつ、とはじけ
る。はじける。はじける。

ひばなきえる。とだえる。くらく、なる。い
しきくらく。くらく。

気がつくとかかなりの時間が経っていた。日が
沈みかけている。体には布がかけられている。
猫車に乗せていた死体隠し用の布をかけられて
いたらしい。あたりにあたり以外に姿はなく。

凌辱された、ということに一応なるだろう。
だが、爪の傷すらない。

猫車に積んでいる予備の服を着て地底に帰る
ことにする。体は動きにくいものの、この状態
で夜闇を迎えるのはあたりでも危険だ。服を着
ようとすると、落ちていた一枚の紙に気づく。

「とてもかわいかったですよ。あと、意味の
ない発音を聞き取ろうとしたのは意外でした。
ぜひ、また遊びましょう。典」

……そういうことか。注意力を逸らすためだ
けの、言葉ですらない発音。

帰路、思った、体の満足度ははるかに典のほ
うが上だけど、お空やさとり様と致したほうが、
幸せだ、と。

ただまあ。気持ちよかったことは確かなのだ
けど。傷つける意図もなかったらしいけど。も
う一度、ぐらいは、相手してもいいけど。

もしも見事射止めたら

インサイト

地底暮らしのあたいに、地上から一通の手紙が届いた。藍の署名がある。八雲の正式な署名ではない。藍個人のものだ。

さとり様の部屋の隣の部屋で開封する。二枚の便箋と、あたいには読めない文字の札が一つ。

一枚目の便箋にはこうあった。

『狐二匹につままれてみませんか 札を破れば転送いたします 八雲藍』

まあ、えっちのお誘いなのだろうけど、狐が二匹とは思いつく節はある。あの管狐、か。

二枚目の便箋には何も書かれていなかった。不審に思ったあたいはその空白の便箋を眺めたり回転させたりしたけど、何もなかった。流石にあぶり出しはしなかったけど。

さとり様の了解を得て、移動のため札を破る。

おそらく地上のどこかにある建物の一室に居た。きちんと服を着た藍と典が、茶菓子を前にして談笑している。

「来ましたか」

「来たか」

……あたいは理解した。ここでのあたいは『ゲーム盤』だ、と。まあ、気持ちよくしてもらえるか。

「では、先手もらいますね」

典にいつの間にか後ろから抱きつかれ、人耳の後ろを舌と指で撫でられている。まあ、こうなるとは思っていたので心の準備は少しは出来ている。いかに八雲や大天狗直属といえど、地霊殿の火焰猫燐を亡き者にしたことかわかれば、ただではすまないだろうという読みもある。まあ、正直油断していたのもあるけど。

意味が聞き取れそうで意味のない後ろからの囁き、焦らすような、時折的確に当ててくるような指や手のひら、凹凸の少ない体が背にぴったり密着して、じりじりあたいの内側の熱を高めていく……。

「基本、視覚外からの確に攻めていくわけか。聴覚の使い方が上手いな、これはちよつと思いつかなかった。手技もかなりこなれている」

藍が典を褒める。いや、あたいの立場はどうなの、と思う間もなく「おりんさん」と囁かれて、びくう、っとなる。

「いきなりの名前呼びで、防御、かなり崩せますよ」

典が嬉しそうに解説する。するな。

典はあたいを嬉しそうに剥き、自らも即座に脱ぐ。張り型をわかるように手元に置き、全身で前から、舌と手と腕と腿と腹で密着しつつ、責め立てる。

「乳がないので密着しやすいのです」

典が嬉しそうに解説する。

「管狐だからか、小柄な体の使い方が上手いな。とても参考になる」

藍が褒める。あれ？藍？そんな甘…、と感じた途端、張り型を入れられてしまい、思考が吹き飛ぶ。

狐同士の問答に注意していたので、身体の反応度合いを忘れていたようだ。挿入されただけで、意識が蕩けて、完全に雌の感覚に支配されてしまう。

どろどろと垂らしていたそこは、ほんの少しの動きでさえ、強い収縮と液で迎えてしまう。

「あは、おりんさん、とろとろですねー」

侮辱のようなその言葉さえ快感電流になってしまう。

典の的確な、張り型のなぞり方や、乳首への口・指の責め等で、ぐぐぐ。っと背が弓なりになる。え、もうなの。浮き上がる意識。もったきもちよくなってたかったのに。あっけなく、実にあっけなく、しろくしろく、イク。その時何を叫んだか叫ばなかったとか記憶にない。かなり深くいったようだ。

「あは、いったいったー」

典が嬉しそうにはしゃぐ。あたいのいき顔を見て、かなり上気したようだ。

藍から渡された水を飲む。念のため塩をつまんでおく。しばし休息。

「では、私の手番か」

藍が立ち上がり、服を脱ぐ。その豊満な身体を惜しげもなく晒す。手番…：そうだよねあたいゲーム盤だよね。わかっていたので無言でいる。なにかありそうだし。

「こう存在が永いと、小手先の技よりは基本が最も良い、という結論に達してだな。結局、こういうものを使うことが多い」

そう言うと、札を下腹部に貼り、男性器の形のものを現出させる。若干先端と幹の段差が強い。

「陰核を變形させたまがい物だが、十分すぎるほど使える。大きさよりも技術が重要だな」

見せつける藍。その対象はどちらかといえば、あたいではなく典。

「靈力の消費上、私には無理だと思われませんが」

「そんなに靈力は使わない。あらかじめ札に蓄積しておけば可能では？」

「なるほど」

だーかーらー、話し合いながら乳や尻を揉むな。愛撫するなら愛撫に集中してほしい、と思いつつも反応するあたいの身体……また違和感。藍がそんな言動？典に、甘くない？なんだろう。

その違和感は挿入、それも最奥への情け容赦のない突入によって碎け散った。

深い。いちばん大事な、深いところをえぐられている。ぱち、ぱちと火花が散る。藍は最奥で肉のまがい物をふるふると震わせ、最奥を揺らしながら、あたいの全身を後ろから抱きしめている。典は前から見ている。

抱きしめられながら深いところを揺すられえぐられて

いる、それだけで飛びそう、碎けそうな意識。

あたい自身がどんな顔をしているのかもわからない。

この肉の、肉と肉の結合が今のあたいの全てで。

少し戻して深く強く突かれた、それだけでしろくしろく。しろく。……達したと知ったのは事後。

ひくり、ひくりする身体、ところどころばやける意識をなんとかかき集めようとして。ぴりぴりする意識。だらない顔をしているのだろう、多分。

典と藍があたいの顔を覗き込んでいる。

「これが基本ですか、すご……」

「色々と回ってからの基本だから凄い、とも、先天的にこう出来るともあるようだ。あ、お燐は無理に起き上がらなくていいぞ」

ふやい、無声音しか出ない。小さく頷く。

「私が、小手先の技に頼ってたのは……」

「それはそれで良い、選択肢は多い方がいい。ただ、基本の破壊力というのはやはり大きい、と示したく。」

「……とても勉強になりました、一旦失礼していいですか」

「どうぞ。ただ、また来てほしいかな。こういう会話が出来る相手はなかなか居ないから」

「……はい、また都合をあわせて」

あたいの上で狐が会話している。あたいはふわふわしながら、それをぼんやりと眺めている。無理をせず、すう、と意識を離す。

はつきり目が覚めた。身体は拭かれ、薄布が被せられている。傍にある水を多めに飲む。藍はいつもの服を来て、何やら大量の符とか文字を空中に浮かべている。

「何を……」

「ああ、目覚めたか。感謝する、それと騙して悪かった。」

「騙して？……あたいは、こうなることはわかっててここに来たけど、何を騙したの？」

「便箋の二枚目、何も書いてなかっただろう？」

「書いてなかったね」

「実は、あれには、お前の皮膚の周囲に展開する式が貼ってあった。典の諸情報を取るのに使った。これは完全に八雲の都合だ、すまない」

「……それって」

「典を煽って気づかせず、私の手番……挿入する直前に回収した。飯綱丸勢力も、典自身も少し動きが気になるので、取っておきたかった」

「その式って、……今のあたいには何もない？」

「数回確認したが、何もない。元々お前自身になにかをするものではないし、式は全て回収した。なにか変なことがあればすぐに言ってくれ。ただ、今回、無断でそういうことをしたので……」

「今回についてはお礼や詫びはいいや、貸しにしとくかな。で、どのぐらいその情報は取れたの？」

「予定していた分は全部、それ以上にどっさり取れたのでじっくりと解析が必要。……しかしお燐、お前に『すばいうえあ』を仕込むのは、強いな」

「知らないうちに仕込んでおけば気づかれにくいのもわかるけど。まあ、いいか。あたいは気持ちよかったし。」

甘すぎる果実の裏には、狐ですら騙される、何かが仕込まれてるかもね。

下賤な狐に完全敗北して

一生言いなりにさせられる話

寺座 綿菓子

菅牧典。その管狐は、僕の周りで「下賤な狐」ということで有名な存在だった。

たしかに妖狐の一種である以上、人を惑わせてこそ、というところはある。けれどそれにしただって彼女はやりかたが下劣、で品性というものが感じられない。色仕掛けはともかくとして、舌先三寸、二枚舌……と小物のような振舞いをしてばかりなのだ。

そんな存在を放ったらかしにしていたら、僕ら妖狐すべての品位が落ちてしまうというもの。だからそんな彼女を少し懲らしめてやろうと思って、山の神社近くの茂みへ菅牧を連れ出してみたわけだったのだけど……

「あれえ、どうしたんですかあ？ 私をわからせに来たのに、なにをモジモジソワソワしちゃってるんですかあ？」

「う、うるさいうるさいっ！ 別にモジモジしてなんて……なんで僕がお前みたいな下賤な狐なんか！！」

さすがに悪名高い相手だけあって、僕は品の無い狐にペースを乱されてしまっていた。

「そっかあ、じゃあカンチガイしちゃってたみたいですね♪ 私、あなたと仲良くなれたらいいなーって思ってたから、変な考え違いしちゃってたのかも」

「う、うう……っ」

これだ…… この仕草や表情のせいで、気持ち揺らいでしまうのだ。

僕が敵対心むき出しで「懲らしめてやる」と声高に言い放っていたのに、少しも動じる様子も見せなかった悪い狐。そのまま彼女は無警戒な調子でチョコンと目の前までやってきて、「好きな感じの顔してるし、お友だちになりたかったのに」などと言ってくる。

クスとつとイタズラっぽく笑って目を覗き込んで、「やっぱり可愛い顔してる」なんてうそぶく性悪狐。そんな言葉なんて口先だけのものでしかないのは解っているし、相手にしないものじゃないハズなのだけれど…… なのに僕は情けないことに、そのひと言ですっかり動揺してしまったのだ。

「でもお、あなたも解ってるハズですよ。わからせるとか

懲らしめるとか、そんな面倒なことしたって少しも楽しくないって。どうせだったら、一緒に遊んだりするほうがいいに決まってるじゃないですかあ♡」

少し身を屈めるような姿勢で向けてくる上目遣い。眉をハの字にして、薄ら笑いを浮かべるその表情は何もかもを見透かしているかのようで、明らかに僕を小馬鹿にしてきている。

なのに心はなぜかドキドキとしてきてしまっている。見下されているのがわかっていのに反発することもできず、ただゴクリと喉を鳴らすばかりになっている。

「ねっ、面倒なことなんて忘れて私と遊びましょうよお♡ こうやって女の子から誘われるのを拒むなんて、そんなの男の子失格ですよお？」

「く、ううっ そ、んなこと言って……いつも人を惑わしてるんだろっ お前のやり口なんて……みんなわかってるんだから、な……っ！」

身を屈める姿勢のせいで、その身体が描く柔らかそうな線がよくわかるようになっていた。この子の胸はお世辞にも大きいとは言えないようなサイズなのだけど、ピタリとフィット

トするような服を着ているせいで、なだらかな膨らみがハッキリとわかるようになっていいる。それが、僕の視線を釘付けにさせてしまう。

特徴的な長い前髪の間から見つめてくる目。妖しく挑発的な囁きを紡ぐピンク色の唇。そして、甘くて爽やかな花のような匂い……

女の子からこうまで近付かれて好意的そうな言葉を向けられるのが初めてであるせいで、鼓動はすっかり高鳴ってしまっていた。腰の奥もきゅっと疼きを覚えだして、恥ずかしいところが首をもたげだしてしまっていた。

「だ、誰がそんな口車に乗るもんか！ 僕は、お前のそういう性根を叩き直しに来たんだからなっ!!」

そんな妖しい感覚を振り払うために、僕は荒々しい声を叩きつけていく。そうでもしないと、このまま彼女の誘いに流されてしまいそうだったから。心はすでに、好意的な様子に向けてくれる女の子に乱暴なことはしたくないと考え始めてしまっていたから……

「……それならあ、コレについてはどう説明するんです？」でも、それが虚勢であることなんてみんな見抜かっていた。

「ほらあ、あなたのエッチなトコがふっくらしてきちゃってますよお♡ これってえ、女の子とアソビたいって思ってるからじゃないんですかあ？」

「や、め……っ なにして……そんなトコ、触るなあっ!!」

すりゅ♡ すり……♡ くにゅうう……っ♡♡

一番恥ずかしいところが、柔らかい手で服越しに撫でられていく。熱さや硬さを確かめるように、てのひら全体で包みながらさすり回されていく。

「おちんちん、ガチガチになってる……♡ 私のことやっつけてやるって言ってたのに、どうしてこんなになってるんですかあ？ ねえ、教えてくださいよ。ねえねえねえ♡♡」

「そ、そんなこと……っ!」

どうしてなんて簡単なことだ。女の子に近付かれて、しかも女の子にアソコを触られて、そのせいで股間が熱くなってしまうているのだ。つまりこの下賤な狐のせいでこんなになってしまっているのだ。

でもそんなこと言えるわけがない。僕はこの子を懲らしめに來てたんだから。なのに、その相手に興奮しているだなんて認められるわけがないじゃないか!

「隠そうとしてもダメ♡ 私はみーんなわかつちゃってるんですからあ♡♡」

けど、黙っていても結局同じなのかもしれない。この子にはみんな見透かされているんだから。むしろ彼女は、こうなることがわかっていて距離を詰めてきていたんだろう。

「あはっ、かっこ悪いんだあ♡ わからせようとした女の子にドキドキして何もできなくなっちゃうなんて♡♡ 膨らんじゃったおちんちんをナデナデされてお顔ふにゃふにゃにさせちゃうなんて♡ そんなんで妖狐の品位がどうこう言っちゃうんですかあ？ よわよわ狐くん♡♡」

「い、言わせておけばっ! あ、ああああっ……!!」

すりゅ♡ くにゅうう……っ♡♡

挑発的に煽り立てられて激昂した感情は、ほんの一瞬で情けなくふやけてしまった。熱く反り返り続けていたアソコが、手で狐の影絵を作る形にされた指でつまみ取られてしまったのだ。

「ほらあ、悪うい狐がすぐそばにいますよお♡ 男の子に本気出されたら、私なんかカンタンにやられちゃうに決まってるのに♡♡ だから腰をクネクネさせてる場合じゃ

ないハズですよねえ♡♡」

「や、め……っ そんなの、反則……！ こんなことされたら、何もできなく……うああああ!!」

身体の疼きが、切なさが、みるみる大きくなってくる。

腰の奥で、まるで砂糖が溶けて沸き立ってるような感覚が膨れ上がってくる。

思わず前屈みになる僕の耳に、性悪な女の子が口を近づけて妖しい言葉を囁きかけてきていた。細い身体がすりつけられてきて、女の子の柔らかさを感じさせられていた。

「あーあ、もうおちんちんビクビクさせちゃって♡ ちょっと触られたただけでおもらししちゃいそうになるなんて、本当に弱虫狐くんなんですわー♡♡」

す、る……っ するするする…… ぱっっ

「あっ…… 僕の、下帯…… 直接触るなんて、そんな……」
そんなだったから、直にまさぐられることになったらもうダメだった。

アッサリと丸出しにされ、女の子に握り込まれることになってしまう張り詰めた上反り。恥ずかしい体液をこぼしていたモノは、性悪狐の手でヌルヌルをまとわりつかされていく。

妖しくヌルついた感触を広げながら、チュコチュコとリズムよくしごきたてられてしまう。

「あはっ、頑張ってガマンガマンですよ♡ そうじゃないと、下賤な狐に負けさせられちゃいますよ♡♡」

ちゅく、にゅっ♡ にゅくにゅくにゅくにゅぶっ♡♡

先っぽを包む皮が引かれて、めくれては戻ってを繰り返されている。女の子の手が動くたびに、ソレの中身が腫れ膨らんで粘液を垂らしていく。

もう限界だ。負けたくない一心でどうにかガマンしてきていたけど、下の袋の小玉は引きつっているし、腰はガクついてしまうし、おちんちんだってビクビクと跳ね震えてしまっている。

「い、いやだ…… いやだ、負けたくないっ 僕は、お前を懲らしめにきたのに……それなのにいい!!」

このいやらしい手を振り払ってしまえばいいのに、そうすることができない。このままじゃ情けなく負けてしまうのに、プライドをへし折られてしまうのに。なのに女の子の感触が惜しいと思ってしまう。柔らかい体温を、甘い匂いを、感じ続けていたいと思ってしまう。

いつそのまま負けてしまえたらどんなに楽だろう。相手のほうが手強かったということにしてしまえば、負けさせられても仕方ないことにできるかもしれない。

「あ、あ……あああ……っ！　くる……熱いのが、大きいのが、来ちゃううう！！」

ぎゅっと歯を噛み締める。自分が弱いとか未熟だったとか認めるのは悔しいけれど、それから目をつむってしまえば最高の気持ちよさを味わえる……　そんなふうに、心へヒビが入りかけていく。

「今は、私とあなたのふたりきりなんですよお……♡」

「……っ！！」

そんな瞬間だった。まるで気持ちが揺らぐときを見はからっていたように、妖しい言葉が吹きかけられたのは。

「ここにはほかに誰もいない。だから何があっても私たちだけのヒミツにできちゃう……♡」

「あ、あ……うあああっっ！！」

女の子が背伸びをして、耳元にそっと囁きかけてくる。

その甘い声に、誘いに、まるで水を垂らされた角砂糖のようにながふやけていく。

「ほら、びゅくびゅく……♡　女の子の手でいっぱい気持ちよくなって、びゅるびゅるー……♡♡」

「や、めっ……本当にもう、出ちゃうからあああああ！！」

どくんっ　びゅっ、びゅるるん

ぐびゅるるるるるる……っっ！！

あっという間だった。僕は先っぽをつまんでちゅこちゅこといじってくるイタズラな指の中で、熱く粘ついた白いものをバクハツさせていってしまうのだった。

「あはっ、負けちゃった♡　ちょっと触っただけで射精しちゃうなんて、敏感で可愛いおちんちんですねー♡♡」

「う、くっ……ううっ……！」

本当に、誰もいないところでのことでよかったと思う。

そうじゃなかったら僕のみっともない姿を人に見られてしまっていたんだから。威勢よく挑みかかっておいて、あっけなく屈してしまう様子をさらしてしまっていただろうから。

「でも大丈夫♡　あなたがお顔をふにゃふにゃにさせてミルクをとぷとぷしちゃったことは、私しか知らないんですから♡♡」

この子は何を考えているんだろう。懲らしめてやると突っ

かかった僕を返り討ちにするつもりなら、もっと容赦なく屈伏させることができてしまうハズなのに。それなのにどうして逃げ道を残すようなマネをするんだろう。

彼女の思惑が理解できず、射精の気だるさの中で呆然とする僕。その前ではクスクスと笑う女の子が、手にべっとりまとわりつく粘液を小さな透明の筒へと流し込んでいる。

「ほら、このできたて精子だって、この中に入れちゃえばどこにも残らない……♡ あなたが負けちゃった証拠だってしっかり消しておけちゃうんですよ♡♡」

だけど粘っこい体液を細い容器へ入れるというのはやはり難しいんだろう。ダマをつくりながら糸を引いて指にまとわりつく白濁は、こぼれて筒の口あたりをヌトヌトと汚してしまっていた。

「……………」

女の子の持ち物が精液まみれになる…… その光景はたまらなくいやらしくて、爆ぜたばかりのアソコはもうウズウズとムズつきだしてしまっていた。あっけなく無様な姿をさらすことになったのに、悔しさや情けなさも感じずに興奮を昂らせてしまっているのだ。

「ふふ……っ♡」

なまめかしい視線が向けられてくる。ねっとり細めた大人っぽい目が、僕の心へと絡みついてくる。

そんな狐の子が、ユラリとした動作で顔を寄せてきた。

それこそ彼女の長い前髪が額をくすぐり、鼻と鼻とが触れてしまうところまで近付かれてしまう。

茶色の瞳が、ピンク色の唇が大写しになる。女の子の甘い匂いでいっぱいに包まれていく。疼きだしていたアソコが、一気に熱くなってくるのがわかる。

「私がさっき言ったこと、憶えてます？」

「……………」

なんだろう。思いもしていなかった言葉に目が点になってしまった。というより、女の子に間近まで迫られて囁かれたせいで、頭が回らなくなっている。

「私はさっき、あなたと仲良くなれたらいいなって言っただですよ♡ あなたの顔、可愛い感じで好きなタイプだから、お友だちになりたいなあって……♡♡」

「こ、好み…… 友、だち……」

それこそ呼吸も忘れてしまいそうなほどの緊張状態。そん

なときに囁きかけられる言葉に、胸は完全に射抜かれてしまった。まるで心の中へピンクの絵の具を落とされたかのように、甘い気持ちがいっぱいに広がっていつてしまうのだ。

「でも、友だちって言うのは正確じゃなかったですよ♡♡
こういうときはあ、恋人って言うのが正しいのかも♡♡」

する…… しゅるるる…… ぽやっ

本当に恋人へ向けるような甘ったるい目をしながら、女の子がその白い服を脱ぎ落していく。中からは黒い肌着とシンブルな黒い下着で際どいブズンを隠した、頼りないくらいに細い身体があらわになっていく。

しかもそのまま典は僕の前で座り込み、大きく脚を開いていつてしまう。そして精液まみれになった筒で黒の薄布をズラし、ヌラヌラと濡れ光った大切なところをさらけ出していく。

「な、何考えて……っ!」

「言ってるじゃないですか♡ あなたと、恋人になりたいなあって……♡♡」

思いもしないときに、思いもしないトコロを見せられる。初めて目の当たりにした女の子のブズんに、頭はクラクラと

めまいを起こしてしまっていた。それでも意識のすべては秘密の縦スジに吸い寄せられて、完全に釘付けになってしまっていた。

「私と、遊びましょ♡ 私と恋人になって、えっちしちゃいましょ♡♡ 懲らしめるつもり相手だった私でよければ、ですけど……♡♡」

「……」

くちゅ♡ ちゅく♡ ちゅぶぶぶぶうう……♡♡

僕の精液が注がれた透明な筒がワレメの間をなぞっていく。やがてその細長いものは女の子の中へと潜り込み、粘ついた水音をたてながら浅い出入りを繰り返していく。

「ここであつたことは私たちしか知らない♡ だから何があつても何も無かつたことになるんです♡♡ あなたが私をやっつけに来たことも、負けさせられたことも……♡♡」

ぬ、ちゅ♡ ぐちゅ……♡ ず、ぶぶぶぶうう……♡♡

僕の精液が入った透明な容器が典の中をかき混ぜていた。口の辺りに白いものをまとわせた筒が、半分近くまで女の子の中へと入り込んでいた。

物欲しそうな目が向けられている。僕と恋人同士になりた

いと、僕の精液が欲しいと求められている。

「今までのことはみーんな無かったことにしてえ、私と遊んじゃいまして♡ 私とえっちして、できたての熱ういミルクをお腹の奥にたっぷり注いじゃいまして♡♡」

ちゅ……ぷんっ♡♡

細い道具が引き抜かれた。白く濁った体液の入った容器が、ヌラヌラと光る肉の花との間で糸を引いていた。

そんな光景に理性なんて保っていられるわけがなくて……

「う、あ……あああつつ!!」

僕は胸に引っかかるモヤモヤを振り払うように叫びながら、女の子へと覆いかぶさっていくのだった。

ちゅく……♡ ぬりゅ♡ にゅるんっ♡♡

無我夢中で熱いワレメへと上反りを突き立てていく。けれどそれは濡れた花の間で滑るばかりで、まったく中へ入ることができない。

「ふふっ、気持はわかるけど焦っちゃダメ♡ 経験無いのがバレバレでカッコ悪いよぉ♡ ほら、入り口はこーこ♡♡」

そんな張り詰め棒に手が添えられて、先端が小さな口へあてがわれていた。

アソコの先にキスされたような感触に背筋をとろけさせながら、僕は女の子の中へと腰を沈めていく。

にゅ……ぷ♡ ずりゅりゅりゅ……

ぐっぐううう……つつ♡♡

ぷっくりと腫れ膨らむ先端が入ってしまったと、あとはもう吸い込まれていくかのようだった。小柄で線の細い身体つきをした典のアソコはやっぱり狭くて小さいのに、少しの抵抗もなく僕を受け入れてしまうのだ。

まるで引きずり込まれていくみたいに思えるほど、腰が勝手に深く沈んでいってしまう。初めて味わう女の子の中は温かくヌルついていて、おちんちんやその根元の奥までもがとろけてしまいそうだ。

「ふ、あ……これ、すごいっ ヌルヌルしててキュウキュウ締め付けられて……何も考えられなくなるううっ!!」

「あはっ、お顔、ふにゃふにゃになってる♡ よかったねー、気持ちいいねー♡♡ 懲らしめようとしてた女の子に恋人えっちさせてもらえて、とっても幸せだねー♡♡」

一番深くまで繋がったところでもう限界だった。舌の表面みたいにザラザラした温かい粘膜で先端のほうを包まれて、

何枚も折り重なった触手のようなヒダで竿を絡め取られて、僕は身動きも取れずに喘ぎ悶えていく。

すぐ正面では、憎たらしく見えていた女の子の可愛らしい顔があった。眉をハの字にして、ニンマリと目を細めて、恋人になってくれた子が楽しげに笑っていた。

その表情を見ていると背筋がゾクついてきてしまう。自分に敵う相手などいないと確信した挑発的な振舞いをする典のことがすっかり好きになってしまっている。こうして煽られてバカにされて翻弄されることに、たまらない幸せを感じるようになっていくのだ。

「ほらあ、今ならさっきの仕返しするチャンスなんだよ♡悪い子な恋人狐の腔内なかをズブズブぐぶぐぶかき混ぜて、二度と生意気な態度をとらせないようにわからせなくっちゃ♡そうしないと一生私の言いなりにされちゃうよお♡♡」

「う、ううつ…… なか、かきまぜて……わからせる……負けたら、一生言いなり……ああああ!!」

わかってる。これだって僕を操るための挑発なんだ。

この子が楽しむために、気持ちよくなるために、そして僕を徹底的に屈伏させるために煽ってきてるだけでしかない

いんだから。

でもそれがわかってたからって、誘いを拒むことなんてできるわけがなかった。

だって典の中はたまらなく気持ちよかったから。典に振り回されることがたまらなく嬉しくなっていたから。典に負けさせられてしまいたいと思っていたから……!

にゅぶ……ぬちゅんっ♡ ちゅく……ぶちゅんっ♡♡

腰の奥から熱い粘りがこみ上げてくるのを必死に抑えながら腰を動かしていく。白い降参の印をこぼしてしまわないように、慎重に女の子の中をかき混ぜていく。

もうそれだけでおちんちんはビクビクと震えてしまっていた。ゆっくりと浅く出し入れをしているだけなのに、僕は背骨までもがとろけてしまうような感覚に襲われてしまうのだ。

「あ、んうつ♡ 先っぽの広がってるトコ、腔内なかで引っかかってるっ♡♡ 硬いので、私の腔内なかこじ開けられてるっ♡♡

私のおまんこ、おちんちん離したくないって言うてるよお♡」

それでも典のほうも快感を覚えてくれているみたいだ。

目をトロリと潤ませて、口から悩まし気な吐息をこぼして、

頬を熱っぽく火照らせて。挑発的な女の子は甘く上ずった声をこぼしてくれている。浅い突き込みに髪を揺らしながら、しつとりと柔らかな匂いをあふれさせてくれている。

けれどそんな女の子は、より強い快感を僕に味合わせてきていた。

言葉の通り、おちんちんを手放すまいとするかのように粘膜の壁が吸い付いてきている。うねくるヒダの奥からジュークジュークと蜜をにじませて、ヌルつきと密着感を強めさせてきている。

「ねえ、もっと♡ もっと激しく動いて、かき混ぜて♡♡ 私の子宮、あなたの精液欲しくて下りてきちゃってるから♡ いっぱいずぶずぶ突き込んで、赤ちゃんのお部屋をとろけさせて、私のこと懲らしめちゃおうね♡♡」

いよいよトドメを刺しに来たんだろうか。僕の下で喘ぐ女の子が、両脚を腰に絡みつかせてきていた。深く捕らえられた下半身はこっちの意思なんてお構いなしに激しい突き込みを繰り返させられていく。

ぐぢゅ、ぢゅぷっ♡ たちゅ、ぬぢゅっ♡ ぐぶんっ♡♡

「ああああっっ！ だめ、やめっ…… そんなにされたら、

もう出ちゃうからあああ!!」

引き抜くたびに、ゼリーみたいな甘い粘膜がまとわりついてきていた。貫くたびに、温かいシロップがいやらしい音をたててあふれ出していた。

一番奥では何かの口みたいなのが先っぽにキスしてきている。典の言葉通りなら、それは僕の精液を欲しがっている子宮が入り口を吸い付かせているということなんだろう。赤ちゃんの素を注いでほしいと、女の子が心の底から求めてきているわけなのだ。

そんなことを実感させられたらもうたまらない。

「あはっ♡ おちんちんビクビクして苦しそう♡ じゃあ、このままネバネバ赤ちゃんの素、どぶどぶしちゃおうね♡ 熱ういできたてミルクを注がれたらあ、子宮がとろけて負けさせられちゃうから♡ そうすれば、あなたと私で引き分けにできるもんね♡♡」

「赤ちゃんの、素を…… し、子宮に……ああああっっ!!」
身体に感じさせられる直接的な快感と同時に、心にも味合わされる幸せな気持ちよさ。それが、さっきよりも激しく射精感をこみ上げさせてくる。

下賤な存在になってしまふんだから。

きつとこの子は、それも見こした上で今みたいなことをしてきたんだろう。僕は身体ばかりか心まで徹底的に負けさせられて、力の差というものを見せつけられてしまったのだ。「ほらあ、ぼんやりしてないでお返事はあ？　せっかく恋人になってお嫁さんになってくれた女の子に、黙ったままでいるなんて酷いと思うんだけどなあ♡♡」

ずりゅ……　にゅぷんっ♡♡

色々な気持ちから放心している中で、女の子が抱擁を解きながらコロンと体勢を変えていく。僕の下から抜け出したこととおちんちんも引き出されていき、ヒクつく肉の花から白蜜が垂れていく様を見せられることになっていく。

グプグプと泡立ちながらこぼれていく赤ちゃんの種。女の子にそれを注いだ白い証。そんな光景を目にしたら言い逃れもできなくなり、えっちな狐の求める言葉を口にするのかできなくなってしまう。

「わかり、ました……　責任、とります……あなたを、お嫁さんにします……　一生、言うこと聞きますから……」

そんなときに思い出す。彼女は管狐という種の妖狐だった

ということ。人に憑りついて思うままに操ったり、その相手の気を喰らう存在だということ。

そんな子にとって、妖狐の気というのはちようどいいご馳走になるんだろう。そして僕は典との間で何人もの子供を作らされて、身も心もしゃぶりつくされてしまうことになるのだ。

「わかってくれればいいんだよぉ♡　私、言いなりになってくれる弱虫さんがだあい好きだから♡　私を満足させてくれる間はあ、いっっぱい幸せにしてあげるからね、パパ♡♡」
絶対的な優位にいることを確信した顔で、お嫁さんになってくれた悪い狐が自分のお腹を撫でている。そうしながら、さつき精液を流し込んだ透明な筒を振って見せてくる。

細い容器に白濁が納められている光景。それは、僕の魂が彼女の胎内にとりこまれ閉じ込められていることを示しているかのようなだった……

囁きは妄想

與七

——いささか、疲れた。これもひとえに、主である大天狗様の無茶ぶりによるところが大きい。もともと、あちこちでおかしな異変が相次ぎ、その度に何故か面倒事に巻き込まれている、という奇怪な状況も原因ではあるが。少し前までは、大天狗様が前線に出る機会などほとんどなかったというのに。下っ端の天狗にでも任せて良いのでは？と言いたくなるのをかろうじて堪えてはいるが。

さてさて、そんな具合で仕事の愚痴をこぼしているこの私は、大天狗様に仕える管狐なのだ。もともと、大層立派な主従関係というわけでもなく、実のところ「必要なことさえやってもらえればあとは自由に動いて良い」といったようなスタンスに近い。まあそんなわけなので、好き勝手に動いた結果、後で大変な事態になることも多いわけだが……。それでもついついやってしまうのは、ひとえに私の能力の所為というのもあるわけだが。

相手の耳元で心地良いことを囁いてやる——心の隙間に上手く付けこみ、煽って気分を上げさせ、骨抜きにする、それが私の得意分野。いい具合に唆してやれば、こちらの操り人形の如く軽やかに、滑稽に動いてくれるというものだ。もともと、そ

れが通用しなかったり、こちらの手を見透かして失敗するパターンもあるにはあるが……。それはともかく、この能力で異変の際は好き放題にやらせてもらった結果、もうそれはそれはハチャメチャな様相になり、そして……。ああ、もう思い出したくはない。そんなこんなで大天狗様からは大目玉を食らい、手前の始末は手前でつけろ、ということ、あちこちを奔走し問題を鎮めている真っ最中。そして絶賛疲労困憊、の最中なのだ、今の私は。

「ふう……。ここいらで一休みしましょうかねえ」

休憩、という名の実質的なおサボリ。だが、そうでもしないと疲労もストレスも溜まる一方である。特に、精神的なあれやこれやのお気持ちというのが、どうにも昂って仕方がないのである。私も狐だから、そういう周期が近づいているようである。

「うーむ……。ムラムラするう」

思わず声に出てしまう。発情手前の気持ちの上りよう、といったところか。こういう時は、実際に……。いやではなく、まずは妄想でもして、気ままに一人慰めながら、落ち着くまで過ごすのが一番だ。そう思った私は、ごろんと落ち葉の上に寝そべった。落ちた枯れ葉が幾重にも重なる、天然の薄い布団の上で、私は大空を眺める。瞳を閉じれば、一瞬にして青から暗黒の世界へ、色々想像を張り巡らせるのにはいい具合である。私

は神経を頭の奥深くに集中させると、もやもやとした感覚を——
まとめにする感触で、とある空想の物語を練り始めた。とびつきり、いやらしく煽情的なやつを。

*

人里をブラブラと歩く典は、ちょうど良いターゲットを見定めしていた。若い色男、それも性格的には大人しそうな者——あるいは、年端の行かない可愛らしい少年。どちらも、自分が手玉にするのには容易い者といえるだろう。さて、早速良さそうな獲物が見つかった。授業が終わったのであろう、寺子屋から少年少女がぞろぞろと出てくる。そんな中、里の外へと続く道へ足を進めていく少年が一人。他の者とは全く違う方面へいそいそと歩いていく少年の姿を見て、典は小悪魔のような笑みを浮かべた。あまりにもわかりやすい行動である、自分は人間ではありませんと高らかに宣言しているようなものだ。しかも、典の鼻はその少年から僅かに漏れ出す匂いを敏感に感じ取っていた。典と同じく、狐の気配がプンプンするのである。まだ少年故に詰め甘い部分はあるのであろう。

とにかく、いい相手が見つかった。典はこっそりとその少年の後を付けながら、無意識に目を細め、舌舐めずりをする。これからあの少年を蹂躪できるのだ、そう考えると、股間が早く

も湿ってきてしまった。人里を抜け、人の気配がほぼ無くなったところで、典は少年の後ろに小走りで近寄った。

「こんにちは」

気さくな挨拶をすると、すぐに相手は振り返った。金色の髪で、目元部分は隠れているようにも見受けられるが、髪の隙間からはあどけない顔立ちが微かに見え隠れしている。少女のようにも見える可愛らしいその顔に、典は思わず「正解だった！」と心の中で喚起していた。

「あつ、こんにちは……。あの、お姉さん、何か用ですか？」

若干オドオドしたような、不安そうな表情を浮かべている少年。相手はこちらを警戒している、というのを否が応でも感じさせる反応である。典は優しく微笑すると、少年——子狐に自己紹介をする。自分は狐の妖怪である、という簡潔極まりない紹介である。そして、すかさずあなたも私と同じく狐なんでしょう？と問うと、子狐は顔を僅かに紅潮させながら押し黙ってしまった。典はそんな緊張しなくていいのよ、とわざと優しくも甘ったるい声を出した。人里にて、自分と同じ狐の匂いを感じ取ったので、お仲間だと嬉しくなってしまういい追いかけってしまったこと、以前里で何度か姿を見掛けたので、仲良しになりたいと思っていたこと——。同族だと知れば、相手の警戒心など簡単に解けてしまう——典の睨んだ通りである。案の定、子狐の表情はすぐに明るいものに変化した。

「ねえ、これからお姉さんのうちに来ない？色々お話ししたいし——」

典がド直球なお誘いを耳元でしてやると、相手はあっけなく首を縦に振る。それで良い、と典は満足そうに頷くと、子狐の片手を半ば引っ張るようにしながら歩き出した。相手は戸惑いの表情を見せつつも満更ではない様子で、既に術中にハマっていることを確信する。少年といえども相手は男、容易いものだと考える典の顔は、既に蕩けたような笑みを浮かべていた。

典の家と言っても、森の中の隠れ小屋のようなもの——それでも、内装は一通りの生活用具に囲まれ、それなりにリラックスして過ごせる環境である。ここまでこうして連れてきただけで、こちらの手駒となるのは確定事項である。典は子狐を中に案内すると、すぐに行動に出る。座布団に座った子狐に向かって、微笑みながら問う。

「ねえ、君は確か、鈴奈庵によく通ってたよね？」

「はい、色々な本を読んで、勉強するために——」

「ふうん、熱心なのね。じゃあ、春画なんかもよく読んでるってことかな」

不意打ちの質問に、子狐の顔が即座に紅潮し、もごもごと口籠る。そんな反応も想定内、と考えながら、典は次なる手を繰り出す。

「春画を読みながら、セズリこいてるんでしょ？キミ」

ド直球な卑猥な質問を投げかけてやると、子狐は完全に典から顔を背けてしまった。しかし、俯いたその顔は恐らく、恥ずかしさで真っ赤になっているだろうといえることは容易に想像できる。典はそんな子狐の反応だけで、気持ちが既に昂っていることを悟る。心臓の鼓動が普段よりも高鳴っているのが、はっきりと感じられたからである。辛抱たまらず、ゆっくりと立ち上がった典は、子狐の元へと近寄る。

「あつ……」

子狐は典の気配を感じて赤くなった顔を上げた。ゆっくりと近づいてくる狐のお姉さんから、えも知れぬ恐怖、そして妖艶さが感じとれる。本能で危険を感じ取ったのであろう、立ち上がろうとしたのを、典がその肩に両手を当てて制した。

「だーめ、まだまだこれから本番なんだから。色んな意味で」

典はそう言うと、子狐の耳元に口を近づけ、更に囁いた。相手の興奮を高めるため、「そういった」雰囲気を持つていくために、である。

「貸本屋のあのコのこと、とか。妄想してるんじゃない？春画みたいなことを、一緒にやってみたって、そんなエなこと考えてるのね」

「ち、違うよ！」

言葉ではそう否定しつつも、心の中ではそう思っている癖

に、そう嫌でもわからせるために、典は次なる一手を仕掛けにかかる。子狐の身体の後ろから抱き着くように手を回すと、ゆっくりとそれを彼の股間へと向ける。

「あぁっ……！」

子狐が女子の如き甲高い声で喘いだ。それに呼応するように、典の身体がピクンと跳ねた。

「ふふ、身体は正直じゃない。ほおら」

そう言っていると、典は袴の上から子狐の股間を撫で回し始める。

既に興奮気味なのだろう、僅かに膨張した肉棒をさすると、すぐに細い鉄の棒に触っているような感覚となった。

「あん、もうおつきくなっちゃった。エなこと言われて、興奮しちゃったんだ」

「や、やめてよお姉さん……」

子狐の懇願の声を無視し、なおも典はその股間を擦る。再び耳元に口を近づけると、甘い声で囁いた。

「もっと気持ちいいことしたいでしょ？キミ」

「あっ……！」

子狐が何か言いかける前に、典は更に言葉を続けた。

「口ではそう言ってるのに、本気で抵抗してないじゃない。本当は、期待してるんでしょう？私がこれから何をするのか。いや——」

すうつ、と息を吹き込み、媚声で呟く。

「これから、何をされちゃうのか。うふふ」

「お、お姉さん……。ボク……」

顔を紅潮させ、目を潤ませる子狐の顔を眺めながら、典自身も身体が滾って来るのを感じていた。股間がムズムズと疼き、早くもいやらしい液がジワジワと滲み始める。

「ねえ、いつもどんなふうにしてセンズリしているの？お姉さんに詳しく教えてくれるかしら」

手を上下に動かしつつ、典は訊ねた。正直に言いなさい、と言わんばかりに、その動きを微かに緩めながら。

「ちゃんとやってくれないと……やめちゃうよ？」

ニヤツと目を細め、小悪魔のような顔で呟きながら言う。子狐はその表情に微かに身体をピクンと揺らし、喘ぎながら答える。

「その……春画を見ながら……してます」

「ふうん、やっぱり春画なのね。どんな春画なの？」

「ど、どんなって……」

「そうね、それはどんな子が出てるの？貸本屋の子みたいな可愛らしい子？それとも——」

クスリ、と笑いながら、典は口を開く。

「私みたいな、狡賢そうなお姉さん、とか」

「そ、それは……！」

「もう、じれったいなあ」

典は不満そうに呟くと、股間の片手を僅かにズラし、棒から柔らかい二つの玉へと標的を移した。硬い部分から一転、プニプニとした独特の感触が手に伝わる。そうしておいて、指を僅かに閉じる動作を何度か繰り返した。即座にその感触は子狐に伝わり、まるで女子のような悲鳴に近い声を上げた。

「ああッ！や、やめてえ！」

「やめないって言ったらどうする？クスクス……」

典は玉を揉みつつ、もう片手は棒の方を撫でるのも忘れずに行う。子狐の目に浮かんだ涙を見ながら、またゾクゾクと全身を駆け巡る快楽に襲われる。

「君の大事なタマタマ、このままギュウって、握っちゃたらどうなるかなあ」

「やだ、やだっ！お、お願いです！やめて、やめてください！」

必死に懇願する子狐の悲鳴を聞き、典は手を僅かに緩めると、またもニヤツと笑った。

「それじゃあ、お話の続きを聞きましょうね。春画に出てる女の子はどんな子か、聞かせてくれるかしら」

安堵の表情になった子狐は、一旦典の顔から僅かに視線を背けると、恥ずかしそうに語り始める。

「その……色んな女の子です。元気な子、大人しい子、同い年位の子、大人のお姉さんとか」

「あら、じゃあ特定の子ってわけじゃないのね。というか、女なら誰でもいいってことかしら？可愛い顔して、とんだ不埒者ね」

「い、いや、そういうわけじゃ……」

「ふん、正直に答えないと、またキンタマさわさわしちゃうわよ」

「や、やめて！」

「あらあら、よっぽど嫌みたいね」

典は苦笑しながら呟くと、今度は竿の方を激しく擦る。袴の上から、何度も上下に往復運動をさせ、硬くなった一物を刺激した。

「ああっ……！」

「やっぱりキミは、こっちの方が好きみたいね、うふふ」

典はそう言いながら、次なる質問に移った。

「そうねえ、じゃあ、どんな内容の春画なのかしら？」

少々抽象的な問いに、子狐は目を泳がせながらうろたえる。

「ど、どんな内容って……。その、まぐわってる様子が描かれた……」

「そんなことは大体わかってるわ。もっと聞かせなさいな、例えば――」

典は耳元で囁きながら、クスクスと笑う。

「こんなふうに、男の子よりも、女の子の方が優位に立ってい

るのとか。貴方好きそうじゃない」

「あっ……！その」

典の手が一層激しく動く。子狐の顔がそれに呼応するかの如く、快楽と戸惑いの表情が増している。

「やっぱりそうなのね。あは、それじゃお望み通り」

典の口撃は止みそうにない。耳元での言葉責めに、子狐はすっかり心を奪われつつあった。もちろん、手で肉棒を扱う快樂も未だ続いたままだ。

「そうだ、キミのアレのことも聞いておこうかな。うふふ、こ・れ」

典は目くばせしながら、甘ったるい声で囁いた。

「キミのここ、おちんちん」

「……！」

子狐の顔が一層真っ赤になる。典はその反応にまた身体を疼かせながら、問いを続けた。

「まだ実物は見てないけど、勃起しても小っちゃくて、とっても可愛いわ。ねえ、皮は剥けてるの？どうなの？」

「えっ、か、カワ……？」

狼狽する子狐に、典は優しく問いかけた。

「皮って、わからないかな？おちんちんの皮のこと。おちんちんって、先っぽが剥けて、桃色のおっきい亀さんの頭みたいなのが見えるじゃない」

「えっ……えっ……えっ」と

戸惑う子狐に、典もうーんと首を傾げる。

「んー、春画のおちんちん、思い出してみて。あれあれ」

「あっ、そ、そっか。で、でも……その」

一瞬だけわかった、というような表情になるも、すぐにまた困惑の表情になる子狐。典はそんな子狐の顔を見つめながら、手の動きを早くする。お話も良いが、こちらはこちらで重要だ。

「あうっ、えっと、実は……」

「うん？どうしたのかな。何か思い出したりした？」

優しい問いかけに、子狐は顔を更に赤くしながら答えた。

「ボクのおちんちん、春画のとはちょっと違って……。なんか先っぽが赤くなくて、その……」

典はそれを聞き、クスリと笑みをこぼした。子供らしくとても可愛らしい。となれば、その辺を刺激してやればいい。もちろん、お得意の耳元での囁き、言葉で。

「へえ、じゃあキミはおちんちんの皮がまだ被っているってことね。ちっちゃくて、可愛い子供ちゃんなんだ」

ゴシゴシと子狐のモノを扱きながら、典は囁いた。淫語を交えながら子狐の耳に届けるという行為により、典も自身の興奮度が上がっていくのを感じていた。子狐のビンビンになった棒の先からは先走りの液が漏れ、袴にじんわりと染みを作っている

る。典も同様に、パンティの股間部分の変色がわかる程にラブジュースをおもらししていた。子狐と典、二人の口からは荒い息が漏れ、快感に伴う身体の昂りも更にてっぺんへと昇っていた。

「そ……そんなふうに言わないでえ」

子狐が恥ずかしそうに顔を俯かせる。だが、そんな子狐の姿を見て、典の嗜虐の火は更に勢いを増した。卑猥な言葉責めに更に拍車が掛かる。

「キミは、いつも皮オナニーをしてるのかしら？皮を被ったおちんちんを、そのままおてでシコシコって、上下に激しくコススしているの？」

火照りだした顔で子狐に聞く典。子狐はそれに喘ぎながら返答する。

「は、はい……。そうです」

「うふふ、それじゃあ皮が伸びて、余っちゃうわね。でもね、

それは良くないの」

「えっ……」

「皮が被ってるのってね、女の子に嫌われちゃうのよ。不潔だって」

「そ、そんな……」

子狐の涙目になっている顔を見ながら、典の身体がまたピクンとなった。タマタマを握ろうとした時もそうだが、軽く加虐

してやった際の可哀想な顔を見るとたまらなくゾクゾクする。一方で、棒を刺激してやることももちろん忘れていない。ビクビクと男根が反応しているのは、服の上からでもわかる程である。

「皮とおちんちんの間に、汚いカスが溜まっちゃうの。センズリした後にしっかり剥いて洗ってあげて、清潔にしないと駄目なのよ。キミは、お風呂でちゃんとおちんちんを洗ってないんじゃないの？」

「は、はい、ごめんなさい……」

「うふふ、それじゃあ臭いくさーいおちんちんじゃない。きつたなーい。不潔ー」

「っ……」

典の言葉責めに、子狐は涙目のまま俯いてしまっている。典は満足したようにニヤニヤ笑いながら、肉棒を抜くスピードをだんだん早める。

「こんなおちんちんじゃ、おしっこした後、皮の間におちんちんの汁が残っちゃいそう。下着に染みて黄ばんだりするんじゃない？どうなの？」

「そ……それは」

「おしっこが染み込んで、黄色くなった下着……ああ、お姉さんも見たくなっちゃった」

典は手元に視線を移す。扱っている棒から溢れ出す汁の染み

は、一段と広がってきている。興奮の度合いは最高潮に近くなっている証拠である。

「キミが気になってる、貸本屋の子がキミのおちんちんを見たらどうなるかな？皮が先つちよまで被って、皮の間にきったないカスがたっぷり溜まった、臭くて汚い真性包茎おちんちん……」

典はそう言いながら、耳元でふうっ、と息を吐いた。子狐もそれに反応してビクツと身体を揺らした。

「だーいすきなあの子に、勇気を出して告白してみない？ボクのおちんちん見てくださいって。おちんちんが包茎なんで、下着におしっこが染みて黄色くなって、くさいくさいってなっちゃうんです、って。毎日セズリこいて、白いおしっこのカスがいつぱい溜まった、スケベな短小包茎子供ちんちんを見て、好きになってくださいって……」

「そんな、そんな恥ずかしいこと言えないよ……あうっ」

はあはあと息を吐く子狐に対し、典は口撃の手を緩めない。そろそろ、限界のようだから――あとはもう、最後の追い込みをかけて、スツキリさせてあげようと。

「じゃあ、お姉さんに見せて頂戴。あなたの包茎おちんちんを、ね？」

「や、やだよお……」

「ふうん、そう。お姉さんの恥ずかしいアソコも、見せてあげ

るのになあ」

典はそう言うと、子狐の手を取り、自らの股座に持っていく。子狐の指の先が、すっかり湿り気を帯びた秘部に触れた。

「ああっ……お姉さんっ！」

子狐が1オクターブ高い声を上げた。典は子狐の耳元に口を当て、トドメと言わんばかりの囁きを続けた。

「いいよ……お姉さんはキミの包茎おちんちんでも。お姉さんのおまんこ、もうこんなにグチョグチョになってるのよ！ね、ね、見てみたいでしょ！？」

「あ……あ……それはあ」

すっかり淫語責めで蕩けた顔になった子狐に向かい、典は舌舐めずりをしてみせる。

「うふふ……キミのおちんちんと、このグッチョリトロトロのおまんこで……まぐわってみない？」

子狐の心臓が一段とドクン、と鳴ったかのような錯覚を覚える。相手はもうすっかりこちらの虜、典の手中にある。口撃の手を緩めず、典は子狐の耳に吐息を掛けた。

「いいよ……我慢しなくても……私と出して、パパになっちゃっても……。キミの子供の、ママになってあげる」

言葉と共に、典の一物を擦り上げるスピードが、一段と早くなった。それに呼応するかのように、子狐の吐く息も荒々しくなる。典は最後の一押し、と言わんばかりに、子狐の唇を奪っ

た。相手の「んんっ！」という情けなさど快楽の混じった呻きを聞いた瞬間、典も股座から液を放出する。典の手に包まれた肉棒が、何度もビクビクと鼓動し、熱い子種を服の中に暴発させ、生臭い香りを沁み込ませていく。

「ああっ……はあああ……」

典は絶頂の感覚を味わいながら、同じく快楽が頂点に達した子狐の竿を優しく撫で扱う。ドクンドクン、と形容できるような液体を吐き出している一物は、服の上からでも熱く感じる。典の優しいナデナデにより、子狐は真っ赤な顔で荒い息を吐きながら、肉棒を脈動させつつ残りの汁を捻り出す。典は子狐の顔と、その股間を交互に見ながらニタアと笑った。

「出ちゃったね。くっさーい、ネバネバドロドロの白いオシッコ」

再び耳元で囁かれ、子狐は身体をピクンとさせる。

「気持ち良かった？シコシコって、私のおてては」

男根を扱う動作を見せながら感想を問うと、子狐は余韻の恍惚の表情のまま、無言で頷く。完全にこれは堕とせたな、と典は確信し、思わず目を細めてニヤツとする。

「ああ……あったかいね、キミのお汁は。精液たーっぷり、おもらししちゃったねえ。あーあ、こんな状態じゃ気持ち悪いでしょ。ってことで」

淫語を交えつつ、クスクス笑う典は、子狐に再び顔を寄せる

と、その頬にキスをした。

「ホント、可愛いね。キミは」

視線をすぐに下に向ける。子種を吐き出した子狐の股間にある。

「うふふ、精液いっぱい出しちゃって、これじゃ気持ち悪いよね。じゃ、脱いじゃおっか」

子狐の顔が一層赤くなる。パクパクと何か口を開けて喋ろうとしている子狐の口元に、典は優しく手を這わせた。

「心配なくていいよ。お姉さんに身を委ねなさい。もっと、もーっと……気持ちいいことしましょ？ねっ」

「お、お姉さん……ボク……まだ物足りないよ」

子狐は赤い顔で荒い息を吐き出しながら、典の細い目を凝視している。ああ、これはメスを襲いたくてたまらないオスの顔だ——典は満足げに舌をペロリと出し、悪戯っぽい笑みを浮かべた。同時に、片手は自身の股間に添える。すっかり自分の秘部も出来上がってしまったっている。これはもう、お互いに準備万端という何よりの証、ならばこれ以上のことはオッケーということ……。

「いいよ……それじゃ、お布団に——」

これからが本番、と思うと自然に顔がニヤついてしまう。子狐の方も、やりたくてたまらないという顔を向けている。さ

て、まずは彼の服をじつくりと脱がせて、下着にベツトリと付

着した精子の生臭い匂いをクンクンと堪能し、それから――。

だが、そんなことを想像している最中に、予期せぬ部外者は唐突に訪れたのであった……。

「お前、何をやっている!？」

「!？」

後ろから聞き覚えのある声が響く。いつも私の耳に届けられる、凜とした迫力のあるそれ――あつ、これは上司の……。私の妄想タイムは、ここで一旦終了となった。

*

「お前、何をやっている!？」

その声でビクンと我に返った。いい具合に妄想の世界で気持ちよくなっていた私は、それはそれはだらしなない顔をしていたに違いない。片手は湿った股間に添えられていたし、口からは涎が垂れてきていた。そんな私を見下ろしながら、大天狗の上司・飯綱丸様は腰に手を当て、仁王立ちになっている。

「ははあ、その様子では淫らな妄想に耽っていたな。この淫乱狐めが!」

半ば呆れたような罵倒の声を上げると、飯綱丸様はそのまましゃがみ込み、私の耳元に口を近づけて呟いた。

「お前には色々と教える必要があるな。来い、「わからせて」やる」

有無を言わせない勢いだった。飯綱丸様の逞しい腕が私の華奢な腕をやや乱暴気味に引っ張った。ああ、これはお仕置きコースだなと悟ったが、泣く子も黙る大天狗様相手では抵抗は叶わない。なされるがままに腕を引っ張られる私は、思わず泣き笑いの表情になっていた。これからどのように「わからせ」られてしまうのか?そう考えると、股間に僅かにできた恥ずかしいお汁の染みが、更に大きくなるのを感じた。

了



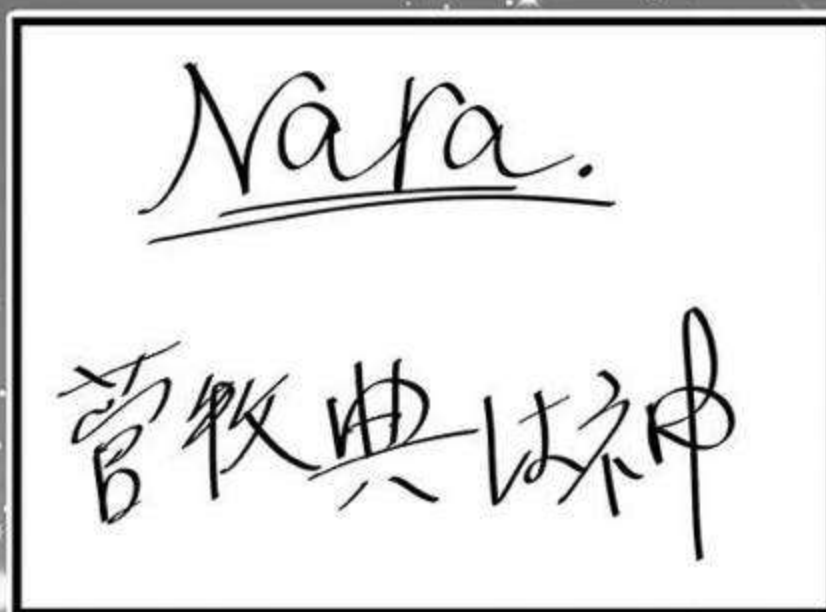
囁かれた人達



お尻向けて誘ってる顔で
描く事が決まっていたので
悩むことなく描きました！
流石ドスケベフォックス！

ドスケベ合同に
参加させて頂き
ありがとうございました！

少年ほげほげ
@shounen-f





スケベフォックス
描けて良かった。

藤のりひろ
Twitter: @ao_norifuji

ミケちゃんが想定以上にスケベ
おやじみたいになってしまったが
「白いのを汚したい性癖」設定を
使いたかったのでゆるしておくれ
そして露骨なちっぱいをかけて
楽しかった。ああいうの描いて
うpするとなんか
消されそうよね おくぐ



下賤な狐だよ♡

おもいか



典の服は
とても破れやすい
素材でできています
だからああなります
みんな知ってるね



ウラザサ

僕は
お仕置きした方が
良いと思います。

鹿味噌。



典ちゃんの身体に
存在する突起
ひたすら舐めたい

ザック
@zack_tobako

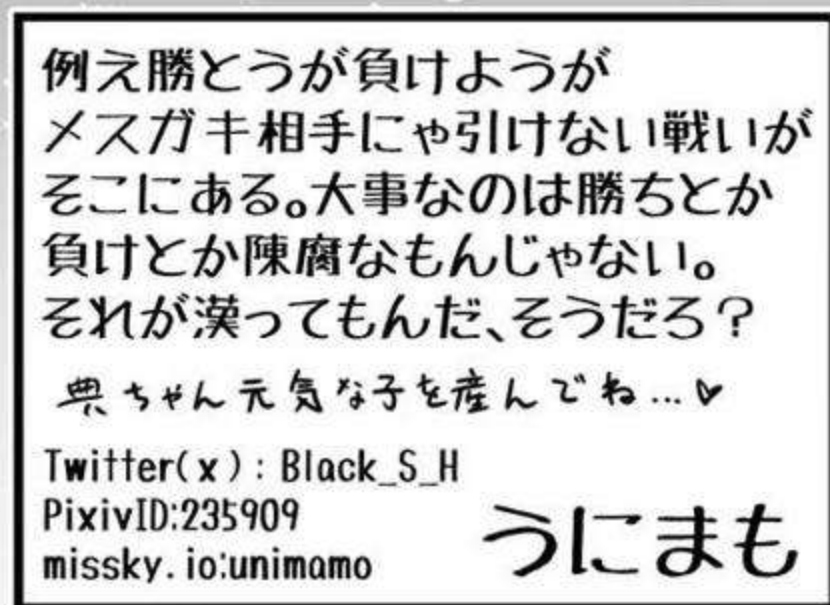
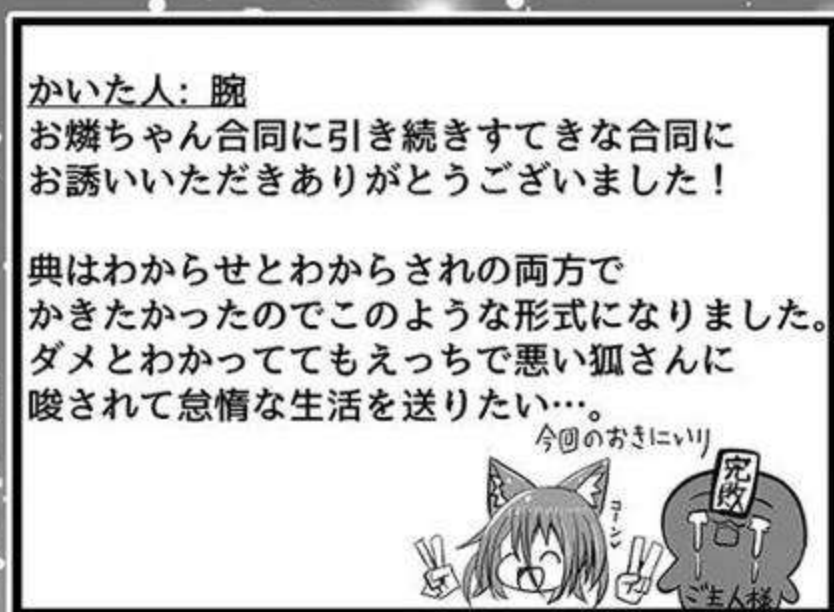
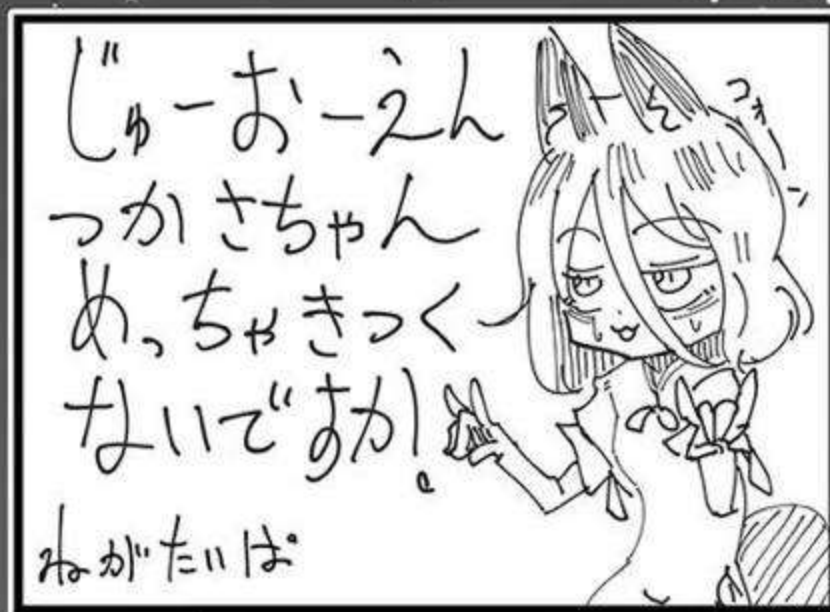


典ちゃんって
絶対良い匂い
するよね(確信)

アチバナ

おにぎり
食べます？





どうも、主催です
菅牧典合同お楽しみいただけただしょうか？

菅牧典はやはり板ですよね、板。それはもうベッタ
ペタの板。まな板だからそそるモノがあるんです
よ。みすちーに乳盛りがちだけどこれだけは譲れ
ない
そのくせこの狐はスケベすぎるだろどうなってん
だおい！



宵闇鳥
Twitter: @yoiyamitori

下賤な狐ってワード、

あまりにも **ド助平** ゆえ

使わずにはおれませんでした

喚く狂人

インサイトと申します。合同参加は今
回で三度目になります。ZUN様、主催の宵闇鳥
様、そのほかお世話になっている方々には頭が
上がらない日々でございます。紙媒体は大変です。
動画なども色々とお作りしております。ニコ動で。
大抵がお燐メインです。お燐かわいい。

Twitter: @insight_jinro

まとめリンク: <https://lit.link/insightY>

メスガキってなんだ……
僕は雰囲気メスガキを書いている？

白いネバネバの入った試験管で
アソコをずぷずぷして誘うシーンを
思いついたのはまさに天啓でした。
女性優位は最高……

寺座 綿菓子

典ちゃんは妄想の中で、
イケメンや可愛いシヨタとあれやこれやしてる、
そんなイメージしかありません。
キャラ的にいつか「わからせられる」可能性は高そうです。
というかすでにもうそうなってる例ありますよね
この合同誌でも多分あるはずですし ()

與七

Twitter: minaseryunosil
Pixiv : 288194

■拝読
ありがとうございました。



エンジェルダスト (@uterus666)

誰でし
ようね
全
く!!

いいづなまるめぐむ
**飯綱丸龍と
部下の
管狐は
番いの関係。**

貼こんだ
ったな誰
のは張り
紙だ!?

春藤平四郎

素敵な合同に参加させて頂き
ありがとうございました！
典ちゃんの素足での足コキが
描けて満足です！

石田(@ikedayamada_)

典ちゃんにカレーうどんを
全力で啜ってもらいたい

宮瀬 ゆっこ

Twitter: myunyumu
Pixiv: 5094870

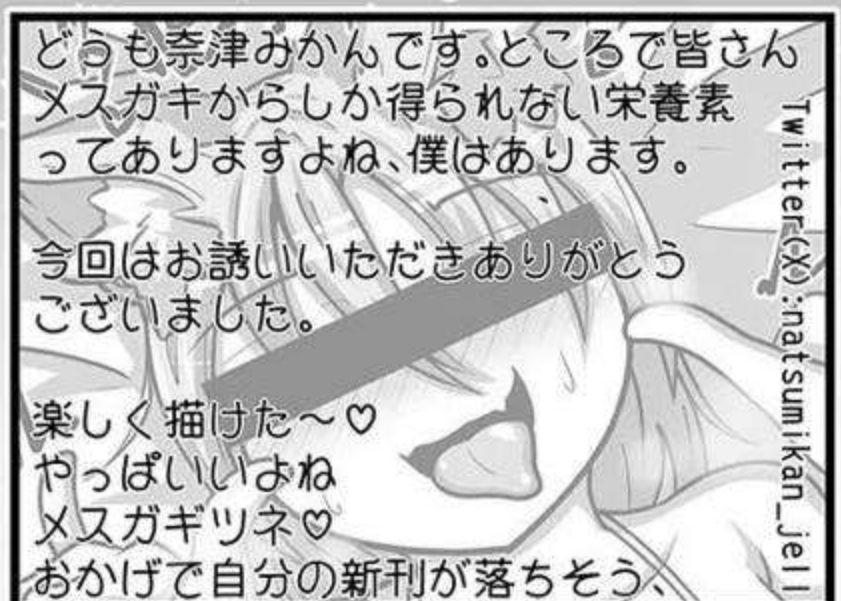


どうも奈津みかんです。ところで皆さん
メスガキからしか得られない栄養素
ってありますよね、僕はあります。

今回はお誘いいただきありがとう
ございました。

楽しく描けた〜♡
やっぱいいよね
メスガギツネ♡
おかげで自分の新刊が落ちそう、

Twitter: natsumikan_jell



-奥付-

『ドスケベフォックス管牧典合同』

発行者：宵闇鳥

連絡先：yoiyamitori@gmail.com

発行日：2023/10/15(東方紅楼夢19)

印刷：ねこのしっぽ 様

原作：上海アリス幻楽団

東方project

-無断転載及び複製を禁止します-



番傘番外地
石川ナゾゾニク
にとさん
エヤプス
石田
エンジェルダスト
ねがたいぱ
ちびドラ
楯

THおんと
おもいか
Scorpena
ザック
ウラザサ
そい太郎
Nara
TERA
狐茄拓哉
にゃん

～参加者一覧～

レキシタイふのじ
インサイト
與七
藤のりひろ
寺座綿菓子
うにまも
ひつつ
鹿味噌。
フーポ
少年ほげほげ

喚く狂人
グミちゃん
お紙
春藤平四郎
腕
奈津みかん
タチバナ
宮瀬 めっこ
宵闇鳥

